

仙台市文化財調査報告書第7集

仙台市富沢

裏町古墳発掘調査報告書

昭和49年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第7集

仙台市富沢

裏町古墳発掘調査報告書

昭和49年3月

仙台市教育委員会

序

仙台市南部の長町から西多賀周辺にかけては、戦前より古墳が数多くある地域として知られていましたが、戦後の宅地化の進む中で、それらの多くは次々と調査もされず破壊されてしまいました。その中には、かつて剖抜石棺を出土した古墳も含まれていました。

仙台市高沢の裏町古墳もそうした中で、人知れず破壊されかけた古墳でありましたが、たまたま、昭和47年11月、当教育委員会が定期的に実施している文化財実態確認調査において、その所在が確認されました。

家屋の新築工事着工寸前という切迫した事態の中で、とり急ぎ昭和47年12月に古墳の第一次調査を実施した結果、本古墳が仙台市内には稀少の前方後円墳である可能性が強くなりました。そこで、最終的な古墳の保存策を検討する為、仙台市教育委員会では、国庫・県費補助による第二次調査を実施することとし、仙台市文化財保護委員伊東信雄氏に調査担当を依頼しました。

調査は、京都平安博物館、宮城県多賀城跡調査研究所、宮城県教育庁文化財保護課、東北大学など各方面からの協力をえて、昭和48年6月30日から8月3日までにわたって実施されました。その結果、本古墳は、主軸の長さ40m以上の前方後円墳であり、葺石、埴輪をめぐらした堂々たる古墳であり、埋葬部には、県内では稀少な珠文鏡などが副葬されていることなど、多くの成果をおさめました。

しかし、度々の盗掘の厄などにあって古墳の原形が相当損われていること、地主方における家屋新築の強い要請などによって、まことに遺憾ながら本古墳を後世に保存することを断念せざるをえない情勢がありました。

私達の非力を深くおわびする一方、この報告書が多くの方々によって有効に活用され、学術文化の発展に寄与することを願わずにはいられません。

末尾ながら、炎暑の中調査に従事され、また御協力頂いた方々に厚く御礼申し上げます。

昭和49年3月

仙台市教育委員会 教育長 佐藤敬

例　　言

1. 本報告は、昭和48年6月30日から8月3日にかけて実施された仙台市富沢裏町古墳の緊急発掘調査の正式報告書である。

2. 本報告の内容は、緊急発掘による学術的記録と若干の考察を含む。

3. 本文の執筆担当は、次のとおりである。全体の総括は、伊東信雄が行った。

伊東信雄…… I、 VII

伊藤玄三…… V-(4)、(5)d、e、 VI-(1)、(2)

岩渕康治…… II、 III、 IV、 V-(1)、(2)、(3)、(5)a、b、c、f、 VI-(3)

4. 本報告に掲載した図面の作成などには、伊東、伊藤の指示のもとに、岩渕が統一的あたったが、次の各機関、各位より、多大の御協力を頂いた。

財団法人 宮城県文化財保護協会

藤沼邦彦（宮城県教育庁文化財保護課技師）

木村浩二、鈴木実夫、佐山京子、山田稔（以上、東北学院大学考古学研究部）

5. 本文中の註釈は、本文末尾にまとめた。

6. 裏町古墳に関しては、以前二度にわたり、概報、説明会資料を発行しているが、本報告の記載をもって、優先するものと理解して頂きたい。

7. 本書の編集には、岩渕があたった。

8. 本調査に関する庶務、涉外などは、仙台市教育委員会社会教育課が担当した。

調査事務局：仙台市教育委員会社会教育課（課長）東海林恒英、（前課長）黒沢充、（文化財係長）瀬戸捷夫、（主事）鈴木尚文、朝倉秀之、八木伸善、（嘱託）大泉重治、
岩渕康治

本文目次

序	仙台市教育委員会教育長 佐藤 敬
例 言	
I 緒 言	1
II 古墳の位置と立地環境	3
III 調査に至る経過	6
IV 調査経過	8
a . 測量調査時の所見	8
b . 第一次調査の経過	8
c . 第二次調査の経過	9
V 調査内容	11
(1) 古墳の形態、規模	11
(2) 古墳の外部施設	12
a . 塚輪列	12
b . 墓石配置状況	13
c . 周 澄	15
(3) 墳丘築成状況	17
(4) 内部主体	18
a . 内部主体の形態、構造	18
b . 内部主体における遺物の出土状況	19
(5) 出土遺物	21
a . 塚 輪	21
① 形態的分類所見	21
② 成形、調整技法および焼成などに関する所見	23
b . 須恵器	25
c . 土師器	26
d . 珠文鏡	27
e . 鉄製品	27
f . その他の遺物	28
VI 考 察	29
(1) 古墳の築造年代について	29
(2) 古墳の被葬者について	30

(3) 出土品について	32
VII 仙台市内の古墳中における裏町古墳の位置	35

挿 図 目 次

第1図 裏町古墳の位置と周辺の遺跡	目次表
第2図 名取川流域地形略図	3
第3図 三神峯遺跡遠景	4
第4図 三神峯遺跡出土凹石器	4
第5図 三神峯周辺古墳分布略図	6
第6図 裏町古墳埴輪分布状況	13
第7図 舟石積成断面図	14
第8図 周溝土層断面図	16
第9図 朝顔形埴輪模式図	22
第10図 富沢窓跡	33
第11図 遠見塚古墳	35
第12図 法領塚古墳横穴式石室	36
第13図 兜塚古墳	36
第14図 一塚古墳出土山形石棺	36
第15図 二塚古墳出土削抜石棺	37

図 版 目 次

表 1 仙台市内の古墳、横穴一覧	
図版 1 仙台市内古墳、横穴分布図	
図版 2 裏町古墳調査前実測図	
図版 3 裏町古墳調査実測図	
図版 4 古墳断面土壇図	
A 後円部上層断面図	
B 前方部土層断面図	
図版 5 内部主体実測図	
図版 6 箱形円筒埴輪実測図	
図版 7 埋輪実測図	
図版 8 埋輪実測拓影図	

A 各部実測図

B 刷毛目拓影

図版9 土器実測図

図版10 遺物実測図

(1. 珠文鏡、2. 3. 鉄器、4. 片口土器)

図版11 西多賀地方航空写真

図版12 古墳遠景

図版13 古墳調査前状況

図版14 表土排除の状況

図版15 占墳断面

図版16 裏町古墳葺石検出状況

図版17 塗輪出土状況

図版18 内部主体

図版19 周溝

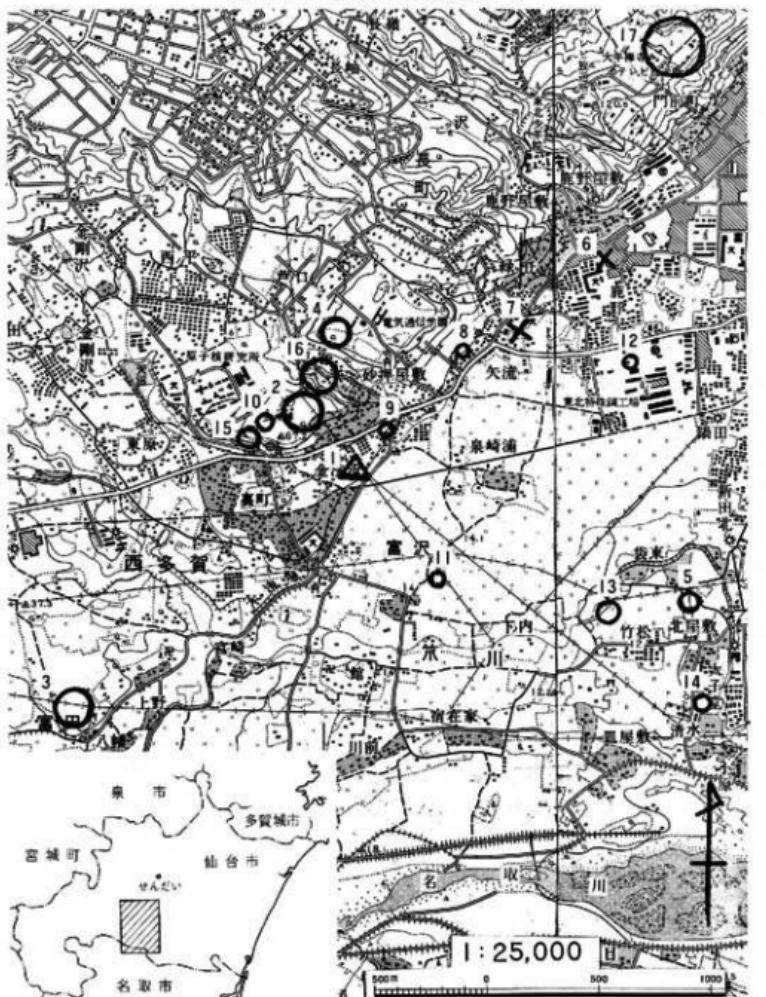
図版20 調査完了航空写真

図版21 塗輪

図版22 須恵器

図版23 珠文鏡、鉄器、片口土器

第1図 裏町古墳の位置と周辺の遺跡



- | | | |
|------------------|-----------------|---------------------|
| 1. 裏町古墳(前方後円墳) | 7. 二塚古墳(前方後円墳) | 13. 六反田遺跡(弥生・土師・須恵) |
| 2. 三神峯遺跡(旧石器・縄文) | 8. 砂押古墳(円墳) | 14. 清水遺跡(埴輪) |
| 3. 上野遺跡(縄文・土師) | 9. 金尻沢古墳(円墳) | 15. 富沢窯跡(埴輪・瓦・銚子) |
| 4. 芦ノ口遺跡(縄文・土師) | 10. 三神峯古墳(円墳) | 16. 土手内横穴群(横穴古墳) |
| 5. 伎造跡(縄文・土師・須恵) | 11. 教導古墳(?) | 17. 茂ヶ崎城跡(中世) |
| 6. 一塚古墳(円墳) | 12. 金岡八幡古墳(円墳?) | |

I 緒 言

裏町古墳は長い間、忘れられた古墳であった。それは、すでに破壊されかかった小円墳と思われていたからであった。わたし（伊東）がこの古墳を最初に見たのは昭和24年であったが、その時すでに封土のすぐらいは削られていた。『仙台市史』に「仙台市内の古代遺跡」を執筆する際、西多賀附近にかつて小古墳のあったことを耳にし、附近を捜索した結果、畠の中の杉林の中で見いだしたものであった。頂上に石祠があって、その附近に埴輪円筒の破片がすてられていた。これで古墳であることが確認されたのである。当時は墳丘上には杉が密生していたため見通しがきかず、前方部を発見することができず、目測で径約20m、高さ約5mの円墳として報告した。^①

その後23年の間に附近の状況は一変した。畠は宅地となり、家が建てこんで来て古墳はいつの間にか人家の蔭にかくれてしまつて人目につかなくなつた。裏町古墳が忘れ去られた理由はここにある。たまたま昭和47年11月仙台市教育委員会の岩瀬鶴翁が市内の文化財確認調査のため当地をおとずれた際には、かっては墳丘上をおおっていた杉はみな伐りはらわれ、墳丘は全貌をあらわしていた。

その際の観察によると墳丘は西方に低く伸びて前方後円墳のように見られた。そこで市教育委員会でははたして前方後円墳であるかを確かめるため、昭和47年12月20日から27日まで主として前方部の調査を行なつた。これが第1次発掘調査である。その結果長さ約40mの西向きの前方後円墳であることがほぼ見当づけられた。

40mの前方後円墳とすると、前方後円墳としては市内で国指定の遠見塚古墳に次ぐ、第2位の古墳であり、古墳全体としても径50mの兜塚古墳に次ぐ第3位の大きさでこの地方としては貴重な文化財である。ところが土地所有者はこの地に自宅の増改築を計画中で、削平寸前であったので、その保護問題の解決が焦眉の急となつた。保存するにしても、破壊を認めるにしても精密な調査を行なつて古墳の実態を把握することが必要であった。そこで仙台市教育委員会では文化庁、宮城県教育委員会と協議した結果、本格的な発掘調査を行なつて保存問題に結論を出すことになり、国費および県費の補助を得て昭和48年6月30日から35日間の第2次発掘調査を行なつた。

調査の結果、墳丘は前方部、後円部とともにかなり削られており、墳丘上の埴輪、瓦石も取去られたもの多く、主体部たる積石石室は古い盗掘によって無残に破壊され、取のこされた副葬品もわずかであることが判明したので、大きな古墳ではあるが、保存措置を講ずるにはあまりにもこわれすぎていると判定、民有地で地主が自家用に使用するという事情をも考慮して、調査後の削平は止むを得ないと結論を出すに至つた。現在は墳丘は削平され、すでに建物が建

てられている。奥町古墳のかっての姿は本書によって知ることができるだけとなった。破壊直前に本古墳が発見されて、…応の調査を行ない調査記録を残すことができたのをせめてもの慰めとしなければならない。

発掘調査の実施に当っては文化庁、宮城県教育委員会の配慮を得ることが多かった。また平安博物館長角川文衛博士が同館も研究調査に多忙の折であったにも拘わらず、当方の要請を快く容れられて、同館伊藤玄三助教授を派遣して調査を援助せられた厚意はわざれることができない。また地主庄子春二氏が文化財調査の意義をよく理解されて、調査の結論の出るまで宅地造成を延期、調査に協力されたことに感謝する。

異常ともいいくべき昨夏の炎暑の下で、発掘に、実測に投身された調査担当の諸君、蔭の力となつて調査事業を円滑に推進せしめられた事務担当の諸君の努力に対しても深い感謝の意を表する。

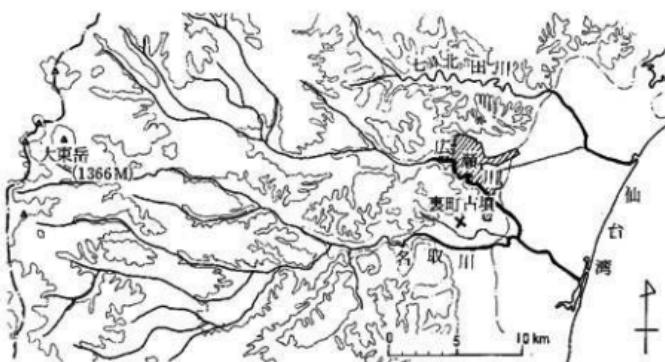
II 古墳の位置と立地環境（第1図、第2図）

裏町古墳は、仙台市宮城字裏町14の1、庄子春二氏所有山林内に所在していた。ちょうど仙台駅の西南方約4.1キロに位置する。古墳の付近には、仙台市内最古の縄文時代集落跡であり、その秀れた眺望と桜並木によって、広く市民になじまれている三神峯公園があり、遺跡は、その三神峯の南麓、国道286号線を越えたところに位置する。遺跡東南方には、名取川の形成した、標高10m内外の肥沃な西多賀耕土を、はるかに望見することができる。古墳付近も、10数年ほど前までは、田園地帯としての環境の中にあったのだが、その後の急速な宅地化の進展とともに、景観もだいぶ変貌し、ために、古墳は、宅地化の中にボツンと残された離れ小島のような状況に置かれていたのである。しかも、古墳東南方に広がる田園地帯も、市街化区域内にあって、区画整理事業の施行により、近い将来、全面的に宅地化される予定にある。

古墳の位置を地理的、地形的に見てみると、仙台市南部を流れる名取川は、宮城一山形県境付近にある奥羽山系大東岳付近に水源を発して東流する。そして、仙台市茂庭付近で中流域に入って川幅を広げる。さらに、仙台市山田、名取市熊野堂に至って谷が開け、數段に及ぶ発達した河岸段丘を形成している。この段丘の形成は、西多賀丘陵を背後に控えた北岸地区において顕著である。古墳は、このうち、中位の河岸段丘上に位置する。墳頂の標高は約31mである。古墳の立地基盤は堅固な砂礫層であり、その上を、黄褐色ローム層、黒色腐殖土層が覆い、古墳は、黒色土層の上に築造せられている。

次に、裏町古墳をとりまく、西多賀地方の歴史的環境について概観してみよう。従来、西多賀地方において、学術的調査の行われた遺跡は稀少であったが、最近における関係者間の努力

第2図
名取川流域地形略図



により、次第に、その歴史的環境の重要性が明らかになりつつある。とくに、従来、北岸丘陵、段丘地帯に集中していると見られた遺跡分布が、沖積平地にも広がっていることが判明したことは重要である。^②

先ず、縄文時代にあっては、主として丘陵部における分布が、以前からよく知られていた。三神峯遺跡（第3図）上野遺跡、根岸前遺跡などが主なものだが、これらは、市内全域を見ても、代表的な縄文遺跡である。このうち、三神峯遺跡は、古くから識者によって注目され、また数多くの遺物を出土してきた。その所属年代は、今の所、縄文前期初頭から、中期前半に及ぶと考えられている。とくに、昭和42年には、宮城教育大の調査により、遺跡範囲の調査がなされ、^③また、昭和48年には、仙台市教委の調査によつて、仙台市内で最初の縄文時代住居跡の

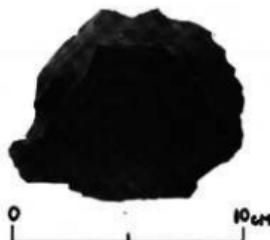
検出がなされている。^④さらに、昭和43年には、旧石器と見られる遺物の出土もあり（第4図）、仙台の歴史の起源を究明する上で、最も重要な位置を占める遺跡として注目される。

仙台市内における弥生時代遺跡の分布は、これまでの所、南小泉遺跡、西台畠遺跡などをはじめ沖積平地帯に集中的に見られる。西多賀地方において、従来、弥生時代遺跡の存在はほとんど知られていないかったが、最近荒川流域の自然堤防上から、弥生式土器が発見されはじめている。この荒川は、三神峯西方、金剛沢付近に源を発し、西多賀耕土を横断して名取川に合流する小河川だが、平地帯を流れる河川にありがちな蛇行現象が顕著で、両岸の自然堤防も、よく発達している。

西多賀地方において、従来確認されてきた古墳の数は、仙台市内全域における確認総量の中でも多数を占める。その中でも、特に、埴輪を有する古墳が多いことが指摘できる。（遺憾ながら、これらの古墳の中には、調査もされずに壊滅してしまったものが多い。）また、これら西多賀地方の高塚古墳の分布に関しては興味ある現象が指摘できる。すなわち、東から、兜塚、一塚、二塚、砂押、金洗沢、裏町といった各古墳は、東西にのびる西多賀丘陵の南麓、標高20



第3図 三神峯遺跡遠景（西多賀耕土より）



第4図 三神峯遺跡出土旧石器

～30mの緩斜面上に一線に連なって分布しているのである。一方、最近、沖積平地においても、埴輪破片の散布地が発見されはじめている。^⑤ 地形的に見て窓跡である可能性よりは、昭和47年度新幹線予定路線内における調査中発見された安久東古墳^⑥などの如く、耕作などによって墳丘を削平された古墳が存在する可能性が強いのではないか。横穴古墳は三神峯北斜面に相当数群在する。いずれにしろ、西多賀地方における大小の古墳の集中は、古墳時代において、西多賀耕土を基盤として高度に発展した農業共同体の確立を物語るものといえよう。

歴史時代における西多賀地方の姿は、いまだ定かでない。一時、「三神峯」が多賀城以前の陸奥國府、すなわち「名取鎮所」説が出されたこともあるが^⑦、明瞭な裏づけとなるものはほとんどない。しかし、付近が東街道のルートにあたっていたことなどと考えあわせ、前代から引続き、生産性の高い集落を形成していたことが考えられる。今、西多賀地方は、仙台市西南部にあって、一向において、のどかな田園風景を保っているが、やがて、急速な宅地化の人波に呑みこまれようとしている。一塚、二塚古墳が消え去って、裏町古墳もそうなってしまったよう、やがては、あの肥沃な西多賀耕土も消え去ろうとしている。

III 調査に至る経過

西多賀地方に古墳が数多く存在しているということは以前から識者によって注目されていた。しかし、押し寄せる宅地化の波の中に、いつしか、それらの古墳の実態や正確な位置すら忘れ去られたものが多く、昭和40年代に入って刊行された全国遺跡地図や遺跡地名表などからも、ごく一部の古墳を除いて、ほとんど登録もれとなり、その間に未確認のまま壊滅してしまった古墳も数多くあると思われる。裏町古墳も、そうした中の一つであった。

裏町古墳について記している文献は、伊東信雄「仙台市内の古代遺跡」(『仙台市史第3巻』昭25)がほとんど唯一のものである。その他では、浜田廉「名取鎮所址」(『宮城県史蹟名勝天然紀念物調査報告第5編』昭4)に西多賀地方の古墳分布略図が掲載されており、図中、東端の古墳が、位置的に裏町古墳に該当するようである(第5図)。この図によって、裏町古墳以外にも、近辺に多数古墳が存在していたことが考えられるが、現在は見当らない。

仙台市教育委員会では、開発と文化財保護の調整が問題化している折りから、市内に所在するすべての文化財の実態の把握・点検、位置・範囲を記録する作業を昭和47年度より開始したが、その初年度において、裏町古墳の所在が確認された。

裏町古墳の確認時の状況は、南側が宅地として利用され、墳丘の南半4分の1ほどが削除され、かっては、うっそうと繁茂していたと見られる樹木も、墳頂部のツゲの古木を除いては皆伐されており、地主庄子春二氏方において、家屋新築計画が進行中であり、まさに、古墳削平工事着工寸前の状況であった。

仙台市教育委員会では、とりあえず、庄子氏に対し、当面の古墳削平を延期するよう要請する一方、昭和47年12月、宮城県教育庁文化財保護室、仙台市文化財保護委員伊東信雄らと古墳の保護問題について協議した。その結果、本古墳の確認時の所見として、円墳か前方後円墳かといった基本的形態の確証が得られなかったため、当面、古墳の基本的性格を把握することが第一であることを確認し、ただちに、墳丘測量が宮城県文化財保護協会により実施され、第一次発掘調査が、仙台市教育委員会によって実施された。その結果、本古墳が主軸長40m余の前



第5図 三神塚周辺古墳分布略図
(浜田廉氏作成図、昭4)

方後円墳として、市内でも有数の古墳である可能性が打ち出された。^⑨ こうした成果をふまえて、昭和48年1月19日に、再度の保存問題打合せ会が、宮城県教育庁文化財保護室、仙台市文化財保護委員伊東信雄、仙台市教育委員会社会教育課の参加で開かれた。その結果、古墳の保存策としては、指定買上策しかないが、そのためには、内部主体の光明を含めた詳細な学術的調査成果が必要であることを確認した。

この結論に従って、仙台市教育委員会では、昭和48年度国庫、県費補助事業として、表町古墳の緊急発掘調査を実施することとし、地主の庄子春二氏には、調査完了まで工事着手を延期するよう要請し、了承を得た。

填丘測量、第一次、第二次各調査の期間、予算、組織などは下記の通りである。（所持は調査時のもの）

▽填丘測量調査

予算：120,000円

期間：昭和47年12月15日～20日

調査主体：宮城県文化財保護協会

委託測量：株式会社東北地形社

▽第一次発掘調査

予算：50,000円

期間：昭和47年12月20日～27日

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当者：伊東信雄（仙台市文化財保護委員）

調査指導：志間泰治（宮城県教育庁文化財保護室調査係長）氏家和典（同、技術主査）

調査員：岩渕康治（仙台市教育委員会社会教育課）

調査參加者：八巻正文（東北大大学院文学研究科） 川村正、大槻良子（東北学院大学考古学研究部） 庄了二郎（農業）

▽第二次発掘調査

予算：1,690,000円（国庫補助845,000円、県費補助422,000円、市費423,000円）

期間：昭和48年6月30日～8月3日

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当者：伊東信雄（仙台市文化財保護委員）

調査指導：志閑泰治（宮城県教育庁文化財保護課調査第一係長）、氏家和典（同、調査第二係長）、岡田茂弘（宮城県多賀城跡調査研究所所長）

調査員：伊藤玄三（京都平安博物館助教授）、桑原滋郎、進藤秋輝、西脇俊郎、高野芳宏（以上、宮城県多賀城跡調査研究所技師）、須藤隆（東北大学文学部助手）、小井川和夫（宮城県教育庁文化財保護課技師）、岩渕康治（仙台市教育委員会社会教育課嘱託）

調査参加者：古泉弘（宮城県多賀城跡調査研究所調査補助員）、清水芳裕、後辺伸行、飯島義雄（以上、東北大学文学部考古学科）、志賀豊徳、鈴木丈夫、木村浩二、山川稔、佐々木利利、富沢英也子、火口宏和、千葉寿郎、小山玲子、宍戸義彦、志間玲子、紫桃尚子、関仁子（以上、東北学院大学考古学研究部）、渋谷正三、小野寺祥一郎、斎藤智恵子、真砂まゆみ（以上、宮城教育大学考古学研究会）

地元協力：庄子二郎、及川源四郎、高坂修吾、小池政次郎、菅原美登利、支倉照幸、沼田治行、庄子勝治、山田しよう、半沢正、

調査協力：宮城県教育庁文化財保護課、宮城県多賀城跡調査研究所、東北大学文学部考古学研究室、菅野寅夫（東北電力）

IV 調査経過

a 測量調査時の所見

墳丘は、南側および東側の一部が、墳丘基底部に達するまで垂直に削除され、断面には、積土上の黒色土と黄色土の互層が顕著に認められた。墳丘の形態は、平面的にはほぼ円形であったが、墳頂部が平坦で、いわゆる截頭形円墳かと思われた。しかし、墳丘の西側には、周辺部との比高1m程度の微隆起状の張り出しが認められ、あるいは、前方後円墳の前方部の可能性も秘めていた。断面観察の結果、この張り出し部分にも、ごく薄くではあったが、積土層が認められた。ただ、この張り出し部と墳丘部分との間に幅1mくらいの溝状の浅いおちこみがあつて、墳丘と張り出し部分間の積土層の連続を遮断していた点が疑問点として残された。墳頂部分には、3ヶ所ほどの盗掘坑があり、その盗掘坑を中心として、円礫、角礫の散乱が見られ、中には、板石、埴輪破片なども検出された。

b 第一次調査の経過

第一次調査における調査の主眼は、第一に本古墳の形態を決定すること、第二に、古墳の規模についての判定、第三に測量調査時認められた接点部の浅い溝状のおちこみの実態をつかむ

ことなどであった。以上の諸点を究明するために、主として張り出し部分を中心として、3ヶ所にトレーニングを設定、合計20m²の面積について発掘調査を行った。

第1トレーニングは、張り出し部の北縁に、東西1m×南北4mにわたって設定された。このトレーニングでは、北側にゆるくおちこんだ遺物包含層を検出、その最下層で多量の埴輪を検出した。

第2トレーニングは、張り出しの西端付近に、東西11m×南北1mにわたって設定された。ここでは、張り出しの積土の互層が、西に、どの程度伸びているかを確認することが目的であったが、トレーニング中央東よりでは積土の互層が検出されたが、トレーニング西半では、畑の深耕などの影響で完全に土層が擾乱され、本来、古墳の積土の互層がどの程度西に伸びていたかを確認することはできなかった。

第3トレーニングは、墳丘と張り出し部の接点付近に、東西5m×南北1mにわたって設定された。その結果、幅1mにわたって古墳積土を断絶した形の溝が検出されたが、この溝の埋土が表土と近似すること、および遺物包含層的な土層の検出も認められなかった点などから、この溝は近世のものであると判定した。つまり、この溝は古墳築造当初のものではなく、後世に、何らかの理由で新たに掘りこまれたものである。

以上の3トレーニングにおける調査結果により、古墳の形態は、一応、前方後円墳である可能性が強く、その主軸長は40m余と判定されたのである。調査後、発掘箇所は埋め戻され、その後の対策は、昭和48年1月19日の保存問題打合せ会の決定に待つこととなった。

c 第二次調査の経過

第二次調査は、昭和48年1月19日の保存問題打合せ会の決定を受けて、古墳の全面調査をめざして実施されることとなった。調査は、京都平安博物館の伊藤玄三助教授を始め、各方面からの参加協力を得て開始された。

6月30日に、現地打合せ会を行い、7月1日から調査が開始された。

調査の大筋の方針としては、古墳全体に、3m間隔のグリッドを設定して、遺物の収納ならびに調査進行中の遺構の変化を相対的に適確にとらえられるようにし、古墳部分の表土は、ベルトコンベヤー3台を動員して全面的に排除して、外形の全容を現わすことを目標とした。実測は、古墳全景については、平板トラバース測量、葺石など細部については造形測量を実施することとした。

調査は、表土の都合上、後円部北東前方の周辺確認作業から開始された。確認された周辺は予想外に浅く、小規模なものであった。その後、墳丘の表土排除作業が開始された。作業は、墳丘上に残された、百木にも及ぶ樹木の抜根に手こずり、炎暑もあって予想以上に難航した。この作業は、墳丘東半から西側にかけて進行した。表土中からは、多量の磚が埴輪破片と共に検出されたが、浮いた状況のものが多く、原位置のものはほとんどなかった。しかし、表土排

除作業の後半になって、墳頂部において、幅1mほどの帯状に、きちんと積み重ねられた状況で埴輪をめぐる葺石列が検出した。こうした出土状況は、当初あまり予想されなかつたことであった。この葺石列は、墳丘西側において張り出し部の方に伸びて、本古墳が前方後円墳であることを決定づけた。

一方、葺石列の検出作業と並行して、墳頂部の探査も進められた。墳頂部には、調査の当初から、盜掘痕周辺を中心として、中小の礫、板石などの散乱が見られていた。しかも盜掘痕は、表土を排除した段階で、当初の想像以上に大きくあけられていることがわかり、実態究明の難航を思わせた。この盜掘痕の周辺を慎重に探査していくうちに、次第に、主体部の状況も明らかにされた。当初は、須恵器、土師器なども散乱し、主体部の壊滅も懸念されたが、幸うじて盗掘の厄から免れた部分から、珠文鏡、鉄器などの副葬品が発見された。

後円部の表土排除が、一応のメドがついたあと、前方部の表土排除も、ほぼ全面的に実施した。一方、調査と並行して、出土遺物の洗浄、注記、接合、一部分類、実測作業も実施した。

7月1日から7月23日までに、ほぼ表土排除作業および構構検出作業は完了し、全景の写真撮影などを終え、7月24日に造り方を設定、7月25日から実測作業にとりかかり31日にはほぼ完了した。また、発掘完了時には、東北電力脊野氏の御協力により、ヘリコプターからの古墳の航空写真撮影が行われた。

一方、調査成果の公表については、7月26日に記者発表を行い、27日には、仙台市教育委員会の経常事業として実施している「子供のための文化財めぐり」において、発掘状況の説明を行った(参加39名)。7月28日には、地元の人々を対象に現地説明会を実施した。参加者は70名を数えた。調査後、8月1日~3日まで一部埋め戻しを行って調査を完了した。

なお、発掘総面積は、約650m²に達した。

(調査後の関係者間の協議の結果、古墳の遺存状況が悪いことなどにより、本古墳の保存工作は断念され、8月23~25日にかけて表町古墳はブルドーザーによって削平され、その命脈をとじた。)

V 調査内容

(1) 古墳の形態、規模 (図版 2, 3, 13)

古墳の形態、規模の決定については、調査前から問題のあるところであった。先ず、伊東は、前掲『仙台市史』において“高さ約5m、径20m許りの円墳”とした。しかし、これは目測によるもので、また、当時は樹木のため見通しも十分にはきかず、低い張り出し部分を見おとしてしまったものである。測量調査および第一次発掘調査においては、墳丘の西側に、明らかに積土の互層を行する張り出し部が認められ、一応、これを前方後円墳と判定した。その規模については、後円部が径約27m、前方部は、その先端が完全に攢乱されていて本來の規模を判定するには至らなかったが、遺存していた部分が13mで、従って、古墳全体の主軸長は40m余と判定したのであった。後円部の高さは、基底部から墳頂部分まで(表土を含めて)4.9m、前方部は約1.0m、であったが、前方部の幅は、宅地が南北両側から迫っていて破壊され、つかめなかつた。

第二次調査においては、古墳の表土をほぼ全面的に排除して、古墳の形態、規模を適確に把握することを目標とした。後円部においては、裾部において、階級状にめぐる葺石列が検出されたが、その葺石列は、後円部西側で張り出し部の方に伸びていることが確認され、張り出し部縁辺においても、断片的ながら葺石と思われる石のならびが確認されて、この張り出し部分は、前方後円墳の前方部であることが確定した。一方、その規模については、計測の基準の設定のしかたに、次の3通りあると思われる。第一は、墳丘裾をめぐる葺石列もしくは埴輪列の下端をもって墳丘の先端とする場合、第二は、文字どおり墳丘、つまり盛り上がった部分の範囲とする場合、第三は、周溝を古墳の境界と考えて、周溝の内側縁を古墳の先端と考える場合であり、裏町古墳の場合、各々について、少しずつ数値が異なっている。特に、問題なのは後円部である。すなわち、第一の場合は、墳丘中心部(主体中央)から葺石列の下端までの半径は11.8~12.5mとなっており、第二の場合は12.5~13.0mとなっている。第三の場合においては、16.5~17.5mである。各々の場合の後円部の直径は、23.6~25.0m、25.0~26.0m、33.0~35.0mとなる。一方、前方部については、前述したとおり、先端部は削除されて、本来の長さは確認できなかつたが、遺存している部分の先端と後円部中心部との距離は27.3mであった。従って、主軸の長さは、第一の場合は、39.1~39.8m余、第二の場合は39.8~40.3m余、第三の場合は43.8~44.8m余となる。従来、古墳の規模などを考える場合は、第二の場合が多かつたようであり、ここでも一応、それにならって、本古墳の主軸長は40m余、後円部直径25~26m、前方部遺存長は14~15mとしておく。一方、高さについては、後円部が、基底部から墳頂部積土上面まで約4.5mであった。これも、墳頂部が盗掘などで、削平されていることを考え

あわせて、もともとは、それ以上あった可能性が強い。（主体部の底面と墳頂平坦部との高低差は50~60cm程度で、表土中に板石などが散乱していた点と考え合わせ、後世、いくぶん削平されたと思われる。）墳頂平坦部は直径10m程度である。前方部の幅は、西と南が削除されているため確定は困難であるが、北縁と中軸線との距離を南に折り返して推定すると、現存の前方部最高幅は約14m、後円部との接点付近での幅は7mである。高さは、基底部から積上上面まで最高部で0.8mである。しかし、これも表土が浅く、多少削平されている可能性もある。前方部最高点と後円部最高点との比高は約2.5mである。また、古墳の主軸の方向はW3°04'20"Nである。

(2) 古墳の外部施設

裏町古墳の外部施設として検出されたものは埴輪列、葺石、周溝などである。

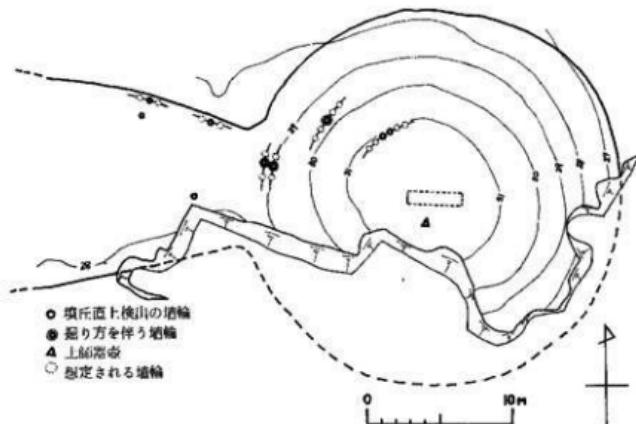
a 墓輪列

裏町古墳で埴輪円筒の破片が発見されるということは、伊東の前掘著中にすでに見えていた。前方部を中心として実施された第一次調査においては、各トレンチで埴輪円筒の破片が発見されたが、原位置をとどめるものは発見できなかった。表探資料としては、後円部では、墳頂部、斜面、墳築と、随所に破片が散見した。また、かって、地主庄子春二氏は、後円部と前方部の接点付近より、半廻した小型の埴輪円筒破片を掘り出したことがあるという。

第二次調査においては、後円部を中心に、多量の埴輪破片を検出した。しかし、原位置を保つ破片は稀少で、大部分は、墳丘下半の厚い表土中で発見されたものであった。特に掘り方を有する破片はさらに少なく、埴輪列の復原は困難な状況であった。しかし、原位置に近い状況で発見された、いくつかの埴輪の出土状況から墳丘各部についての埴輪列の復原を試みてみようと思う。

まず、後円部では、墳頂部から見ていくと、掘り方を有するものはなかったが、墳丘に密着したような状況のものがいくつか検出されている。墳頂縁辺部には、完形のもの1点（これは横転した状態で検出された。）を含む2点の円筒埴輪が検出されている（図版17a）。墳頂縁辺付近では、表土中ではあるが、出土量は多かった。墳丘斜面、葺石列よりも上部では、原位置を保っていた埴輪は、1ヶ所だけ西北斜面で発見されている。これは掘り方を有する。それ以外は定かでない。墳築、葺石下においては埴輪の出土量は多かったが、原位置を保っていたものはほとんど見られなかった。ただ、前方部との接点付近で、上下一対となって、80cmの間隔をおいて、掘り方を有する小型埴輪の底盤が2点発見されている（図版17c）。また、前述したように、地主庄子氏も、この付近から同様の小型埴輪を2、3点掘り出している、とのことで、後円部と前方部の接点付近に、やや貴賃の小型埴輪が何個体か設置されていたことは確実のようである。

第6図
裏町古墳埴輪分布状況



前方部においては、振り方を有する埴輪は発見できなかったが、前方部縁辺付近で、積土表面に張りついたような状況のものが5ヶ所で発見されている(図版17b)。また、第一次調査時における第1トレンチ周辺より完形埴輪を含む多数の埴輪の発見を考えあわせて、前方部縁辺付近にも埴輪列があったことが想定できる。

以上の出土状況から裏町古墳の埴輪列を復原想定してみると(図版6),後円部墳頂縁辺部をめぐる埴輪円筒を主体とした埴輪列、後円部斜面中段と裾部をめぐる埴輪列、後円部と前方部接点付近に、何個体かのまとまった小型埴輪列、そして前方部縁辺をめぐる埴輪列などが想定できる。

b 莢石配置状況(図版3, 16)

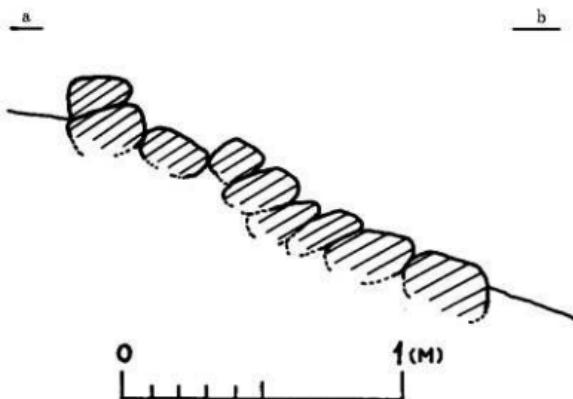
裏町古墳に葺石がある、ということも、伊東の前掲著中にある。しかし、それが、どの部分に、どのように配置されているかは不明であった。発掘調査開始以前は、墳丘面および墳丘断面において葺石らしきものはほとんど認められなかつたが、ただ、墳頂部にあけられた盗掘坑の周辺にかなりの円錐が発見されたので、これらが葺石で、墳頂部には葺石がめぐらされていると考えられたが、しかし、これは、第二次調査の結果によって、主体部の積石空穴式石室が、盗掘坑によって攪乱された際に露呈したもので、主体部を構成する石であったことが判明した。

前方部を中心に実施した第一次調査においては、葺石を配置した形跡を検出することはできなかつた。ただ、周辺検出の為に設定した第一トレンチでは、周辺の埋土中から中小の円錐、

角礫が埴輪破片とともに若干発見されていたので、これは、おそらく、前方部縁辺に配置された葺石がおちこんだものであろうと考えられる。この第一トレンチにおいては、周溝埋土の下部から埴輪破片が発見され、上部から礫が発見されているので、初めに縁辺の埴輪がおちこんだあとで、葺石がおちこんだと考えられる。

第二次調査においては、墳丘のはば全面の表土排除を行った訳だが、その表土中において、埴輪破片とともに、多数の円礫、角礫を検出した。しかし、墳丘上半部に関する限り原位置を保って検出された礫はほとんどなかった。本来の葺石列は、墳丘裾部を帯状にめぐるような状況で検出された。検出面は、表土下50~60cmで、表土排除以前は、こうした配置状況は、全く見当がつかなかった。墳丘裾部をめぐる葺石帯を平面的に見ると、後円部においてはその幅は、約1.5~1.7mでほぼ一定した幅である。また葺石帯の垂直幅、すなわち高さは約60~80cmである。葺石帯の下端と墳丘中心部間の距離は11.8~12.5m、葺石帯の上端との距離は10.3~11.0mの範囲内にある。墳頂部と葺石上端との高低差は210~250cm、同じく葺石下端との高低差は270~320cmであって、葺石の配置が一定の企画のもとに実施されていたことが伺える。さらに葺石の積み方にも、きわめて規則正しく整然たる状況が認められた。すなわち、直径20~30cmの、同じような大きさの円礫ないし角礫（川原石）を下から上へと墳丘面に沿った傾斜できちんと積みあげているのだが、上下一列に要した礫の数もほとんど8~9個と一定しているのである（第7図）。後円部の東半部をひととおりめぐった葺石列は、後円部の西側、前方部との

第7図
葺石積成断面図



接点付近において2方向に分岐する。一つは、そのまま後円部の裾部をめぐりきってしまうもの、もう一つは、後円部裾部のカーブから離れて前方部縁辺方向に伸びていくものである。前者の葺石の検出状況は、やや乱れた感じではあるが、これによってともかく、後円部裾部の葺石列は完全な円形を描いて施されていることが確認され、先の埴輪列の状況と考えあわせて、後円部と前方部を分離するかの印象を与えるのである。一方、後者の前方部縁辺沿いにのびる葺石列は、一旦、後世の溝によって中断した後、点在したような状況で検出されている。このうち、後円部との接点付近が、最も遺存状況良好である。葺石の大きさは、ほとんど後円部の場合と同様であるが、その積み方は、前方部が低いからであろうが、後円部の場合よりは小規模である。すなわち、円礫ないし角礫を2~3個ずつ、平面的には、巾40cm前後、高さ12~18cmで、前方部縁辺の傾斜に沿うような形に積み重ねられていた。

以上のように裏町古墳で検出された葺石は、後円部裾部、前方部縁辺部に限って検出され、その他、後円部上半部、前方部平坦部などでは検出されなかった。こうした配置状況は、やはり、土留めなどを主目的としていることが考えられるのである。

○ 周溝（第8図、図版19）

周溝については、調査以前は、地表面からその微証を認めるることはほとんどできなかった。わずかに後円部北西および北東におちこみ様のものが認められはしたが、それも、第二次調査の結果、後世における攪乱によるものであることが判明した。

第一次調査および第二次調査では、前方部周縁に2ヶ所、後円部周縁に3ヶ所、合計5ヶ所にトレンチを入れて周溝の検出に努めたが、周溝自体の深さが予想外に浅く、また、畑の深耕などの形跡が意外に大きく、周溝の実態把握は容易ではなかった。

後円部では、墳丘東麓、北東麓、北々東麓に各々トレンチを入れて周溝の検出に努めた。このうち、最もよく周溝の形跡を把握できたのが、東麓であった。もっとも、把握できたのは、周溝の内側縁と底底の一部についてであり、周溝の外側縁は把握できず、従って、周溝の幅などは確認できなかった。北東麓には1×10m、北々東麓には2×14mと、いずれも、墳丘中心から放射状方向に長いトレンチを配したが、周溝外側縁はつかめなかった。一方、第一次調査において、前方部北麓に1×4mの北に長いトレンチ（第1トレンチ）、西麓方向に1×11mの西に長いトレンチを設定した。

後円部において検出された周溝内側縁は、墳丘中心部からの距離約16.7~17.0mで、墳丘を円形にめぐるような状況で検出された。しかし、それは、墳丘裾部に接するような形で検出されたのではなく、墳丘裾部から3~4mほど外側から周溝は掘りこまれていたのである。なお、葺石帯下端から周溝内側縁までの距離は5m前後である。前方部北側の周溝は、ゆるやかな傾斜をなしていて、内側縁を把握することが困難だったが、埋土の状況などから、前方部周縁葺

石列の北方約2.5m付近と考えられる。

周溝の深さについては、各トレーニングで差異が認められ、後円部東麓においては80cm、後円部北東麓および北々東麓では25cm、前方部北側では30cmで、概して予想以上に浅いものであった。

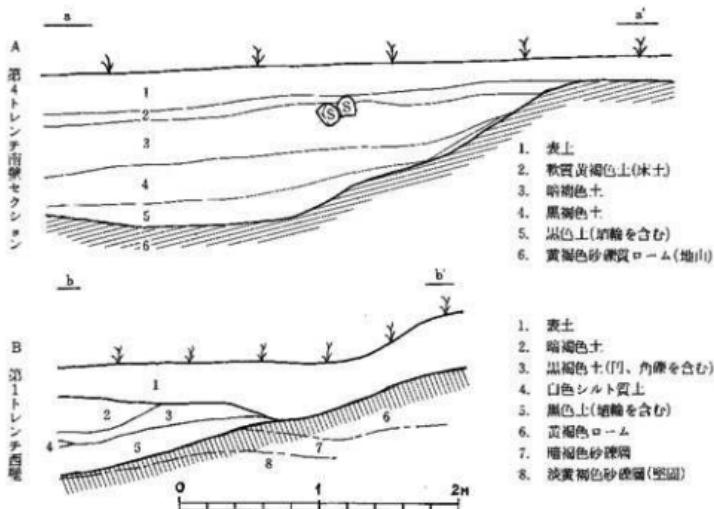
周溝の断面形態は、外側縁の状況がつかめないため、確定できないが、内側縁の状況などから見て、幅の広い逆台形と考えられる。周溝は、Ⅲ表土層である黒褐色土層と黄褐色ローム層を掘りこんでおり、底面は淡黄色砂礫層に達していた。この砂礫層は、ツルハシをもはねかえすほど堅固な砂礫層で、周溝の深さが必ずしも一定していないのは、この砂礫層の高低差によると見ることもできる。つまり、古墳周辺の基盤は、西北から東南へと傾斜しており、西北部の方が砂礫層面が高く、周溝底も高くならざるを得なかつたと考えられる。ちなみに、前方部第1トレーニングと後円部東麓のそれぞれの周溝底の絶対レベル差は2m余もあった。

ところで、周溝の規模は、外側縁がつかめなかつた為、確認できなかつたが、今、墳丘にもられた全土量が周溝から掘り出されたと仮定して、当初の周溝の幅を想定してみよう。

今、墳丘のおよその土量 (Q) = $\{($ 墳丘底面積×高さ $) + ($ 墳頂面積×高さ $)\} \times \frac{1}{2}$ とする。この場合、墳丘底面積 = (墳丘半径) $^2 \times 3.14$ 、墳頂面積 = (墳頂半径) $^2 \times 3.14$ である。

次に、周溝から掘り上げられた土量 (P) = $\{($ 周溝上面積×高さ $) + ($ 周溝下面積×高さ $)\} \times \frac{1}{2}$ とする。この場合、周溝上面積 = (周溝外側縁面積 - 周溝内側縁面積) = (周溝外側縁半径) $^2 \times 3.14$ - (周溝内側縁半径) $^2 \times 3.14$ となり、同様に、周溝下面積 = (周溝外側縁半径 - 2) $^2 \times 3.14$ - (周溝内側縁 + 2) $^2 \times 3.14$ となる。※2は、周溝の上面幅と下面幅の差である。

第8図
周溝土層断面図



以上から $P = Q$ であり、また、周溝外側縁半径を x として計算してみると、
 $x = 29.5 \text{ (m)}$ である。

周溝の幅 (O) は、周溝外側縁半径 - 周溝内側縁半径であるから、
 $(O) = 29.5 - 17.0 = 12.5 \text{ (m)}$ となる。

以上は、あくまでも試算によるものであり、推測の域を抜けない数値であるが、いずれにしろ、広く浅い周溝が掘られていた、ということはいえそうである。

(3) 墳丘築成状況 (図版 4, 15)

墳丘の築成状況に関しては、調査以前に、すでに後円部の断面が、基底部ローム面に達するまで垂直に削除されて露呈しており、積土の互層などがよく観察できた。また、第一次調査の結果、前方部にも積土が認められ、本古墳全体の築成が、盛土によるものであって、自然地形の加工によるものでないことは明らかであった。

墳丘の築成について考える前に、本古墳の占地の状況について考えてみたい。すでに述べたとおり、本古墳は、三神峯丘陵の南麓に前方部を西向きにして築成されたものであった。つまり、丘陵の等高線とほぼ平行方向に築成されたのである。海拔は基底部を基準として 27m で背後の三神峯丘陵（標高 67m）との標高差は 40m、古墳東南方に広がる西多賀耕上（標高 14m）との標高差は平均して 13m 前後である。こうした状況は、現在の林立する宅地化の中では容易に想像しにくいくことではあるが、往時、西多賀耕上から三神峯丘陵の方向を見上げる時は、その削部にくっきりと二子山状の姿が見られたことと考えられる。しかも古墳からは、西多賀耕上をはるかに望見できる。してみると、本古墳の占地の仕方は、かなりの程度、視覚的効果を意図したものであることが考えられる。仙台市南部、長町から西多賀にかけての丘陵裾部には、壊滅したものを含めて、同様の占地をしているものがかなり多い。むしろ、丘陵上に占地する古墳が稀少である。その理由として、一つには、西多賀耕上の集落と丘陵上とでは、やや隔離しているということが考えられるが、あるいは、大和町八谷館跡で主体部だけが検出された古墳が発見されている如く、近世以前に、かなり大規模な築城工事がなされ、その際に古墳が壊されて現在は発見されていない可能性もある。その可能性は兜塚の北西にある中世の山城、茂ヶ崎城跡の場合に考えられる。

次に、古墳自体の積土の状況について考えてみると、後円部、前方部とともに、黄褐色ロームと黒色土とが、各々数 cm 前後の厚さで互層を形成している。それを細分すれば、古墳全体では、数十層にもおよぶ積土層を形成していることになるが、粒子や含有物などにより大きく見ると、基本的には 7 ~ 8 層くらいの大きな互層から形成されている。各層は、おおよそ水平に近く積成されている。

次に、各層の状況を下から順次見てみると、基底部は、黄褐色ないし黄灰色ローム層の上に、

厚さ30cm内外の、固くしまってきめ細かい黒褐色の旧表土層が覆っている。この黒褐色土中からは、ごく少数ではあるが、時期不確定の繩文土器（晚期かと思われる）片が出土する。この層の上に古墳の積成が行われている訳であるが、積土と旧表土の境目付近に、部分的ではあるが、2~3cmの薄い炭の層が認められた。時折、焼土粒などもその中に混入していた。これは、古墳積成以前に、野焼きのようなことが行われたことを示すものかもしれない。

積土層を大きく見ると、黒色土と黄褐色土とが、きめ細かく整然たる互層を形成する層、中に礫を含む層、および砂礫の混入が顕著なきめ荒い層とあり、大別して、この3層が互層を形成して古墳を形作っている。とくに、墳頂から80~100cmの最上層は、ほとんど黄褐色砂礫層に近い積土層で、以下の層と明らかに一線を画し、積成の時期ないし技法のちがいを物語っている。土体部は、ちょうど、この最上層の中に築造されていた。このことは、内部主体と墳丘の築成とが、時期的ないし技法的に別の段階で行われたと考えてよいのではないかと思われる。

前方部については、整然たる（砂礫混入の少ない）黒色土と黄褐色土の互層によって積土が形成されていた。前方部と後円部との先後関係については、接点付近が後世の溝で切られて積土が断絶していたため明らかでないが、前方部の積土の状況と、後円部最下層の互層と類似する点から、あらかじめ前方部と後円部の最下部が同一レベルで積成された後、後円部だけが、高く、念入りに積成された可能性が考えられる。

(4) 内部主体（図版5, 18）

a 内部主体の形態・構造

本古墳の内部主体は、河原石積の堅穴式石室であった。

石室の位置は、後円部のほぼ中央にあり、長軸を東西方向としている。方位は、磁針でW3°04'20"Nを計った。この方位は、古墳の長軸が東西方向であることに応じたものとなっている。石室の置かれた深さは、床面までをはかれば現墳頂下約1mであった。ただし、石室の上部は盗掘などで破壊されていたし、調査時における墳頂部が原形を保っていたとは思われないので、元来は1mよりも深かったろうと考えられる。

石室は、検出された状態では南西部を大きく破壊されていた。けれども、幸にも石室の北壁と北西隅の部分が知られ、破壊を免れていた東部からの測定を可能にした。

この石室は、東西約5m、南北約2.5mの東西方向に長い長方形墓塙の中に築かれていた。墓塙は、墳頂部積土に掘り込まれたものであり、表土除去後明確に知られた側壁での深さは70cmである。

石室は、この墓塙の内部に河原石を積みあげて作られているが、河原石の積みあげは2段目ほどまでしか安定した残りを示しておらず、それより上方は乱れていた。それゆえ、石室側壁が明確なところであっても床面より20~30cmほどの高さまでが知られた程度であり、それ以上

は盜掘と崩壊に災されていた。この石室構造に用いられた河原石は、長径15~50cm、厚さ30cm前後の長円の、比較的扁平な河原石であった。おそらく、近傍の名取川などより運ばれたものと思われ、安山岩質の丸味を帯びた石である。

石室の大きさは、良好な遺存部分において測定すると東西3.6m、南北0.8mで、長方形である。側壁は、必ずしも整った並び方をしているわけではなかったが、一応小口積を原則としたものと見られる。しかし、乱積状の部分も認められた。ちなみに各側壁の石の積み方を述べれば、東壁においては基底に河原石を横積みにし、2段目は石室内に向けて小口面を揃える形で積んでいる。北壁でもやはり基底には横積みに河原石を配していたが、部分的には小口積を示しているところもあった。これらに対して西壁の場合は、基底から2段まで長円の河原石を横積みとしていた。また、南壁においては不整形の石を小口積状にしているが、盜掘場の断面に観察されたところでは横積みによっているものもあり、厳密に揃えられたとは思えないものがあった。ともあれ、石室基底では石の面を揃えて配しており、その原形は東・南・西の側壁で良く知ることができる。ただ、北壁の大部分は盜掘が及んでおり、基底線に出入があった。この石室側壁から墓塙壁までには、南寄断面の観察では1列ほどまで横積み状の石を置き、その外方では乱積みである。他の側壁の後詰の石をみると、ほとんど整った様相は認めにくかった。このような側壁の石積状況となっているのは、石室構築の原則の不徹底もあったかも知れないが、石材にも恵まれなかつたことが考えられる。

石室床面は、直径15~20cmの扁平な河原石を一面に密に敷き並べ、その上に径5cm前後の礫を敷きつめていた。発見された遺物は、この礫上に認められた。

この石室では、調査時にかなり多數の乱された河原石を除去したが、その間及び墳丘上で若干の板石が発見されている。遺存した板石は一辺30cm前後、厚さ5cm前後のものであった。当初は、箱式石棺などの破碎された石材かとも考えられたが、この古墳では堅穴式石室以外の埋葬施設は全く認められなかった。それゆえ、この板石もまた堅穴式石室と関連するものと考えるのが妥当であろう。そう見れば、この板石は、石室の上部を覆った蓋石の遺残であった可能性が強い。おそらく数度の盜掘などに際して破壊・散乱せしめられた蓋石の一端であろうと考えている。

以上述べてきたように、この古墳の内部主体は、築成後の封土を切り下げて掘られた長方形墓塙内に河原石で築かれた堅穴式石室であった。石室側壁は小口積を主とする石積みで積み上げ、床面には大形扁平の石を並べた上を小礫で敷きつめたものであり、天井部は板石をもって覆っていたものであったと推測される。

b 内部主体における遺物の出土状況

堅穴式石室からでは、小形珠文鏡1面、鉄刀子1口、鐵鎌1本が発見された。この3点の遺

物は、先に述べたように石室内床面の小礫上に見出されている。礫上には比較的サラサラした褐色の流入土が4~5cm認められ、遺物を覆っていた。

珠文鏡は、石室東寄りにおいて見出された。その位置は東壁より西へ約1m、南壁より北へ約50cmであり、石室中央部に向って傾斜をした形で出土している。鏡面は下であり、文様のみられる背面を上としていた。発見時には鏡背面は全面緑色の鐵でおおわれていた。下面となっていた鏡面には木質が薄く透かしていた。木目の方向は東西方向に走っており、木棺遺残が附着したものと観察された。

鉄刀子は、鏡の出土個所より東南約50cm離れたところで発見された。刀子の把は北側にあり、刀身は南向きに置かれていた。刃部は西向き、すなわち石室中央に向って配されている。

鉄鎌は、石室西北隅に発見されたが、山上状況は確認できなかった。石室床面直上まで達している盗掘の際に動かされている形跡があり、原位置を保っていないかたものと見られる。

これら3点の石室内遺物の出土以外に、墓塚の南縁中央部において大形の土師器が見出されているのが注目される。この壺は、胴部片側のみが原位置で発見され、他は破片となって盜掘場などより見山されている。胴部の出土状態よりみて、この壺は墓塚縁にはば南北方向に据えられていたものであったとみることができる。出土の深さは、表上約20cmを除去後であった。

そのほか、石室検出段階までの盜掘場及びその周辺の調査において数個体分の須恵器破片並びに糸切底土師壺破片などが発見されている。これらのうち、須恵器破片は埴頂から盜掘場内まで広く発見されているが、特に注目されたのは墓塚西縁附近であった。あるいは、須恵器の一部のものはこの前方部に向う墓塚西縁に置かれたものかも知れないが、原位置を示すと思われるものは見出せなかった。

糸切底土師壺は、主として盜掘場内で見られ、特に墓塚北半の黒色土中では復原可能なものも認められた。

なお、石室内の流入土上に數cmの若干固くしまりを有する上層が見られ、その層には黄褐色粘土粒や土師器小破片を含んでいた。土師器小破片中には高环脚部破片も認められているが、土と共に移動されたものであろうと観察された。

これら遺物の出土状態からみて、竪穴式石室内には、鏡・鉄刀子・鉄鎌のみしか見出されなかつたけれども、おそらく他に推測される玉類などは盜掘によって失なわれてしまったものであろう。しかし、鏡や刀子の出土状態からみてこの石室内における被葬者の位置は、頭部を東としていたものと考えられる。この石室内では、土器類は内部には置かれず、石室外に配されていたふしがある。明らかに知られたのは墓塚南縁の土師器壺であり、西縁附近に散在した須恵器もまたその可能性を示している。これら石室外に見られる遺物は、石室築成後にそなえられたものと見られる。

(5) 出土遺物

本古墳からの出土遺物は、総量、平箱（60×44×10）にして40箱分に近い。そのうちの約8割は埴輪が占め、その他には、後円部主体部周辺から出土した珠文鏡、鉄製刀子、鐵鎌各1点、須恵器、土師器などの土器類、および片口中世陶器1点などがある。

a 墓輪（図版6, 7, 8, 21）

埴輪は、後円部、前方部の墳丘面および周溝底などから数多く出土し、総量平箱30箱分以上に達している。しかし、調査結果でも見られたように、原位置を保つ埴輪が少なかったせいか、完形品もきわめて少なく、全形実測可能なものは数個体にすぎず、いずれも筒形円筒埴輪である。その他の破片のほとんどが、筒形円筒埴輪か朝顔形埴輪のいずれかであった。形象埴輪は全く見られなかった。

① 形態的分類所見

大別すると、いわゆる筒形円筒埴輪（I類）、朝顔形埴輪（II類）とに分類できる。

<筒形円筒埴輪（I類）>

文字どおり、中空筒形円筒形のもので、口縁部>体部>底部といった順に徐々に直径が広がるタイプである。体部には、2本の凸帯が施され、凸帯の間に、表裏一対の透かし孔が穿たれる。このうち、大きさと色調の点で2つに分けられる。一つは、高さ40~50cm、口径25~30cm、底径20~25cm、橙褐色ないし黄褐色で大型のもの（図版6-1~4；21-1-2），他は、完形品が見られないが、推定高30cm前後、推定口径20~25cm、底径10~15cmのもので、前方部一後円部接点付近に集中的に検出された灰褐色の小型埴輪である（図版7-3；21-3）。量的には、前者が圧倒的に多く、出土範囲もほぼ全域にわたっている。

次に、各部の特徴についてまとめてみると、口縁部はいずれも外反する形態をとるが、その口唇部の形態において2つのタイプがあることが指摘できる。（イ）一つは、口縁が一定の厚さのままゆるく外反し、口唇部が中凹して完結するもの（図版6-1~4），（ロ）他は、口唇部が強く外反し、内側が中凹となるものである（図版7-1-2）。前者がもっとも多いタイプで、後者は少ない。

体部、底部に関しては、朝顔形埴輪の破片も含まれているかもしれないことを、予め記しておくかねばならない。体部には、2本の凸帯とその間に穿たれた表裏一対の透かし孔が認められる。凸帯の数が3本以上のもの、透かしが一対以上のものなどは見あたらなかったようである。凸帯は、ほとんどが、幅1cm前後、Σ形のものであるが、変形形態として匁形のものが1点認められた。（図版7-1）透かしの形態としては、円形のものと方形のものとの2種類が認められたが、個体数としては、圧倒的に前者が多い。後者も隅丸気味の方形である。これらは、いずれも整然たる形状を呈し、重んだものは少ない。透かしの直径は6~7cm前後である。透かしの位

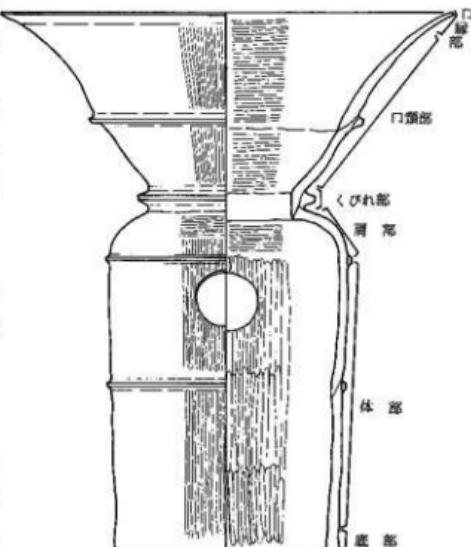
置は、上部凸帯と下部凸帯のほぼ中間やや上方に穿たれていることが多いが、時には、上部凸帯の直下に接するような形で穿たれているものがあり、特に方形のものにそれが多いようである。また、透かし孔を中心として、2本の平行沈線の刻まれている破片も若干認められた。底部は主として2種類ある。一つは、ほぼ直立し、底面付近がやや肥厚するもの（図版6-1～3）、そして内向するものとある（図版7-3）。前者のタイプが圧倒的に多いが、後者は、特に、小型埴輪に顕著である。なお、表面に朱（ベニガラ？）を塗布した破片がしばしば認められたが、すべて、口縁部、体部の破片にのみ限定され、底部で朱を塗布しているものは皆無であった。塗布してあるものも、すべて破片の外側にのみ限定され、内側に塗布した破片は見あたりなかった。完形品の状況から、朱の塗布部位について考えてみると、体部の下部凸帯以上の部位に限定して塗布されたようである。

〈方筒形埴輪〉（図版7-2；21-4）

前方部縁辺部で発見された破片で、わずか1個体分しかない。口縁部および体部上半まであるが、底部を欠失している。横断形が圓丸方形を呈するものである。色調は灰褐色で口縁部の形態は、I類-(d)と同様である。タガはΣ形であるが、タガの直下に方形の透かしが穿たれている。

〈朝顔形埴輪（II類）〉（図版7-4、5；21-5）

朝顔形埴輪の完形品は今回の調査では検出されなかつたため、全形についての詳細な記述は不可能であるが、おそらく、底部および体部下半はI類とほとんど区別つかないものと思われ、II類の形態的特色は、口縁、口頭部および体部上半（肩部）に集約されると思われる。つまり、筒形円筒形の体部が、その上端において、内側に屈曲した上に、外に大きくラッパ状に開く口頭、口縁部を有するものであろう（第9図）。そうした基本的形態に関する変種はほとんど認められなかった。口縁、口頭部は、体部との接点であるくびれ部分からし字形、つまり垂直に近く立ち上がり、次第に大きく外反するカ



第9図 朝顔形埴輪模式図

ープを作るが、一旦、口脣中央部、つまり凸帯のある付近で内弯するカーブを描いたあと、再び一定の外反するカーブをたどって口唇部に達している。口唇部の形態は I-(イ)のタイプがほとんどである。口脣部には、体部との接点であるくびれ部分に一本の凸帯がめぐっているほか、口脣部の中間に一本凸帯がめぐる。幅は 1 cm 前後である。透かしはついていない。一方、体部上半（肩部）は、体部下半から垂直に上がってき、鋭く内弯するカーブを描いて、ほぼ水平にくびれ部分にとりついている。この部分には、透かし、凸帯などはない。口脣部における凸帯の形態は、 Σ 形のものがほとんどだったが、くびれ部をめぐる凸帯の中には、 \triangle 形のもの、図版 8 A-3), \square 形のもの (図版 8 A-2) などが若干見られた。

②成形、調整技法および焼成などに関する所見

A 成形、調整技法

〈筒形円筒埴輪 (I 類)〉

成形は基本的には粘土紐巻上げによっていると考えられるが、器表の内外とも全面的に入念な調整が施されていて、ほとんどの破片について巻上げの痕跡を探ることは容易でない。

以下、成形、調整の工程を簡単に記すと、次のようになると考えられる。①粘土紐巻上げ成形 → ②刷毛目調整 → ③凸帯貼付 → ④透かし穿孔 → ⑤ナデ調整およびヘラケズリ調整 → ⑥朱塗布

② → ③の工程は、凸帯の剥離痕の中に刷毛目が認められることによって明らかであり、④ → ⑤は、凸帯の周囲にナデ調整が行われて凸帯の接合痕跡が消されていることによって明らかである。また、穿孔の際の孔壁の盛り上がりが最終的に残っている破片が多い。⑤ → ⑥は、いずれが先行するとも決めていくが、工程としては、④ → ⑤の場合の方が妥当と思われる。

次に、個々の調整について見てみると、①巻き上げの回転方向などは不明である。②透かしの穿孔は、ほとんど例外なく、埴輪を正立した場合の中央部よりいく分高位に、表裏ほぼ同レベルで穿孔されている。孔壁はきれいにナデ調整されているものが多い。③刷毛目調整 (図版 8 B) は、埴輪外面ほぼ全面にわたって、入念にしかも規則正しく施されている。刷毛の方向は、ほぼ直立するものが大部分だが、中には右傾もしくは左傾するものがある。稀には水平方向の刷毛目も認められる (図版 8 B-2)。こうした変種は、主に口縁部の破片に認められた。刷毛目の種類は、その密度から考えて 3 種類ほどあると見られる。すなわち、1 cm 幅あたり 5 ~ 6 本のもの (図版 8 B-1イ), 7 ~ 8 本のもの (図版 8 B-1ロ), 10 ~ 12 本のもの (図版 8 B-1ハ) と見られたが、このうち、最も多く認められたのが第一の刷毛目である。第 2, 第 3 の刷毛目は、ほぼ同数認められたが全体的には数少ない。④凸帯は、円筒埴輪一個体につき 2 本、あたかも円筒埴輪を 3 等分するかの如くめぐっている。3 本以上のものや 1 本のものは認められなかった。上下凸帯の間隔は 15 cm 前後であり、間に透かしが位置するようになっている。⑤ナデ調整は、外面に関しては、主として口縁部および凸帯の上下に横方向に施されている。この際の調整は指ナデではなく、竹べらなどの調整具によると考えられる。それは、調整

面にごく薄くはあるが、一定した横線が認められるからである。内面に関しては、口縁部から体部上半にかけて、特に入念なナデ調整が行われている。この場合のナデ調整には、前述のような一定した横線は認められず、従って調整具によるナデではなく指ナデ調整と考えられる。体部下半から底部にかけては、ナデ調整はほとんどなされず、タテのヘラケズリ痕跡が残されたままになっている。なお底面は、全体の破片の多くらいが無調整で、直径1cm程度の、おそらく竹と想われる棒の圧痕が4~5本ついているものがあり（図版8A-1），埴輪の成形もしくは乾燥が数本のシノダケを敷き並べた上で行われたことを暗示する。他の破片は、これを削りとて調整している。

〈朝顔形埴輪（II類）〉

朝顔形埴輪の特色は、口縁部および体部上半に集約されており、それだけ複雑な成形、調整がなされている。すなわち、朝顔形埴輪の成形には、第9図のように、3つの成形単位の接合が考えられる。今、それぞれの部分の名称を(1)口縁部(2)口顎部(3)肩部としておく。成形、調整の工程はI類と同様である。個々の調整の状況を見てみると、〈刷毛目調査〉は、外面(1), (2)にかけては、ほとんど直立方向の刷毛である（図版8B-3）。右頬もしくは左頬の刷毛が若干混じる程度である。(3)の肩部は、逆に水平方向の刷毛がほとんどで、直立もしくは斜めの刷毛は少ない。しかし、肩部から体部に移ると直立方向の刷毛となる（図版8B-4）。内面は、口縁、口顎、肩のいずれも水平方向の刷毛がほとんどである。刷毛目の種類は、I類同様3種類あるが、1cm幅あたり5~6本のものがほとんどで、あとは少ない。〈凸帯〉は、口縁部、口顎部に、上下2本あることは前述したが、幅が下から上にいくにつれ厚くなるに対し、厚さは逆に薄くなる点が注目される。〈ナデ調整〉は、I類同様口縁部および凸帯の上下に施されている。これはやはり、竹ベラ様の調整具による。内面には、第一次調整として横ハケが施されるのがほとんどであるが、(1)→(2)→(3)と下にさがるにつれ、ナデ調整もしくは(ヘラ)ケズリ調整を行っているものが多くなる。

B 焼成、色調

焼成上から見ると、主としてI類、II類共通して3種類に分けることが可能である。第一は、埴輪特有の橙褐色で、固くしまった焼きのもの、焼成温度は1000°C前後であろうか。第二は、黄褐色ないし黄色のもので、焼きも弱く、やわらかい感じのもの、焼成温度は土器より若干高い800°C程度と見られる。第三は、灰色ないし灰褐色をしたきわめて硬質のもので、いわゆる陶質の埴輪である。おそらく焼成温度は1000°Cを越えているであろう。もっともよく見られるのは第一のもので、これが全体の3分の2を占め、次いで第二のもの、第三のものは数点認められた程度であった。

b 須恵器 (図版 9-1~11; 22)

須恵器は、後円部盃掘址周辺から集中的に出土した。完全に盃の厄にあってしまった為、完形品は存しない。比較的まとまりをもつて、ある程度原形を推定できる破片は11点を数える。以下列挙すると、①横瓶1個体(体部、底部、口頸部)②台付壺? 1個体(体部、脚部)③壺? 3個体(体部)④縫2個体(体部、口縁部各1点)⑤台付壺4個体(脚部)などである。

①横瓶 (図版 9-1) : 暗青灰色で焼成は良好。円筒形の両端を閉じて横だおしにした、いわゆる俵形の器体の、一側の中腹部に口頸部をとりつけたものである。器厚は、口頸部付近の体部では7~8mm前後だが、体部両側端に近づくに従い厚くなり、両端では、最大1.5cm前後になる。成形は基本的には巻上げ成形によっている。口頸部は失われていてその形態は不明だが、体部の口頸部との接合部分には、直径4.5cmの円孔が穿たれている。体部外面には、両端部を除き、全面的に叩き目を残している。内面は、全般的にやや粗い指ナデ調整が施されている(部分的に指紋なども残されている)。特に、両側端の内面では、粘土をしぼり切った際の、いわゆるしぼり目痕跡がはっきりと残っている。全形の推定法量は、両側端の幅約70cm、体部の中心での直徑約35cmくらいである。

②台付壺? (図版 9-5; 22-1) : 口頸部が欠失している為、全形の復原は困難である。色調は灰色ないし灰白色で、焼成はよくない。一見、生焼けのように見える。壺の底部と思われる部分の下に、透かしを有し斜め下方に開く脚の上半部を有する。壺と見られる上半部は、丸底気味の扁平な底部を有する。脚部は、鋸部に移行するにつれ、開いている。脚部の最上部(すなわち壺との接合部)での直徑は約10cmである。器厚は、上半部が0.7~1.2cm、脚部が0.9~1.1cmである。成形は巻上げ手法によっている。外面には、クロクロ使用の横ナデ調整痕が見られる。内面には、やや粗いナデ調整が施されている。脚部には、入念なナデ調整が施されている。そして、横1cm、縦4cm以上の長方形の透かしが4cm間隔についている。透かしが何段になるものかは、脚部下半が欠失している為不明である。

③壺? (図版 9-4, 6, 7) : いずれも体部上半の破片で3個体分ある。7は、灰白色の生焼け気味のもので成形は巻上げ手法によっている。外面の調整は、第一に刷毛目で行い、その上を、櫛目による平行沈線および波形沈線による文様が、ごく薄く描かれている。球形に膨張した器形で、体部の直徑は19.2cmと見られる。6も同様の器種である。4は、暗灰色ないし黒褐色の焼成きわめて良好で、やや光沢をおびた破片である。小型で、球形に膨張した体部の推定直徑は10cmである。器厚も薄手で0.5cm程度で、裏町古墳出土の須恵器中では、かなり異質のものである。

④縫 (図版 9-2, 3; 22-2, 3) : 3は体部上半部の破片であるが、灰白色で生焼け気味であることは、②および③の6, 7などと同様である。成形は巻上げによっているが、横瓶などと同様、体部の一側に口頸部がとりついている。体部の推定幅が直徑14.5cmに対し、口

頸直徑は4.8cmで比較的小さい。体部の中央やや上部に径1cm程度の円孔が穿たれている。外面は全面に、口縁を軸線とした場合の直立方向の刷毛目が施され、その上に、一定の間隔をおいて波形櫛目文が薄く描かれている。内面には、上下方向のナデ調整痕が施されている。2は、口縁部破片であるが、暗灰色で焼成は良好で無い。形態としては、口縁部が垂直に立ち上がった後、外側に鋭く屈曲し、やや内湾しつつ立ち上がって口唇部に達する砲特有の口縁部である。口縁部には、櫛目による小波形文が施文されている。器厚は0.6cmで薄手である。口唇部直徑は8.5cmである。

⑤脚部破片（図版9-8～11；22-4～6）：脚部のみの破片が4個体分出土している。主体部分は不明である。10は、脚端部が欠失していて全形は不明だが、現存高16cmとかなり大型である。色調は灰白色だが焼成は良好である。4段に及ぶ方形の透かしを有する。透かしのない部分には、櫛目による波形文が薄く描かれている。11は、体部との接合部から脚端部までそろっている。高さは12.5cmある。器形としては、裾部に移行するにつれ、直線的に広がるが、脚端付近では、外反気味に聞く。最下端は尖端化し、外側にツバのように飛び出すかえしを有する。透かしは、細長い長方形のものが一段、四ヶ所に穿たれている。文様は、櫛目による波形文と2本の沈線の組み合せによる。脚端付近には文様はない。8は接合部付近が欠失している。形状、文様などは11に類似する。脚端付近にまで文様が及んでいる。9は脚端のみの破片である。8、11の脚端が、ゆるく外反する程度だったに対し、強くL字形に外反している。脚端の推定直徑31.4cmで、かなり大型の器形と見られる。脚端や上方に2本の凸線がめぐっている。焼成は良好である。

c 土師器（図版9-13, 14）

土師器は、後円部壺蓋付近から、壺、高壺と思われる古手の土師器の他、内黒の壺が4個体分出土した。

①土師器壺（図版8A-4）

原位置を保って検出されたのは体部のみであるが、付近から同一個体と思われる口縁部、底部破片が断片的ながら出土している。色調は黄色で、全体の大きさは、各部が断片的であるため見当がつかないが、口縁部の推定直徑23cm、体部の推定最大径35cm、推定高45cmでかなり大型のものである。この壺について、次のような特徴が指摘できる。器形が大型であること、器厚が1cm前後と厚手であること、比較的固くしまった焼成であること、出土部位が主体部外縁部であって副葬品とは考えられないことなどである。口縁部は二重口縁で外反する。体部は、ほぼ球形に近く胴張りした形態をとる。底部と思われる破片は、宮城教育大学考古学研究会太田昭夫君が調査以前に本古墳頂部壺蓋付近から表探した資料である。底面直徑10cm、器厚1～2cmで底部中央が内側に凹んでいる。穿孔された形跡はない。

②高坏：細片の上、摩滅と風化が著しく、全体の復原は困難である。口縁部、体部、脚部と見られる破片はあるがいずれも細片である。色調は橙褐色でやわらかい。口縁部は、水平よりやや斜め上方に開く形態をとる。脚部は、末広がりの形態であるが広がりの幅は小さい。

③坏（図版9-13, 14）：4個体分あるが、いずれも内黒、ロクロ成形、糸切底のものである。うち一点は完形である。器形はいずれも類似し、平底から斜め上方に内彎気味に体部が立ちあがり、口縁部は、若干外反気味に開いて完結する。いずれも底部を部分的に手持ちヘラケズリしているほか、外面を指ナデ調整で仕上げ、内面はヘラミガキ調整を施して仕上げている。

d 珠文鏡（図版10A-1; 23-1）

直径9cmの小形青銅鏡である。厚さは縁端部で2.5mmをはかるが、薄い部分では1.5mmである。鏡の周縁では反りを示し、縁端では3mmに達している。鉢径は1.8cm、高さ8mmである。

この鏡は、発見時には背面は全く錆でおおわれていた。正面は、木質の誘着が認められた。背面の錆を除去したところ、良好な文様が見られ、鮮明な朱が附着していた。鉢には、鉢孔を貫いている緒が認められた。また、その緒の延長の一部が他に2箇所で遺存しているのが見られた。鉢孔に見られる緒は、径4mm前後のR11段の繊維からなるものであったが、細い糸からなる点で紗糸である可能性がある。

鏡背面の文様は、一種の珠文である。鉢の外周をめぐる細い圓線の外側には、13個の珠文が認められる。珠文は、それぞれ右まわりの方向でめぐった時に尾をひいた如く、やや長円形の形であり、短径3mm、長径5mm前後のものである。この珠文帯の外周には、幅5mmの断面半円形の太い凸帯がめぐっている。この凸帯と周縁の間には外方に向いたこまかなる鋸歯文様がある。鋸歯文は概して不鮮明であるが、3箇所で比較的良く知られる。鋸歯の数は約120本ほどである。縁端部は次第に厚さを増し、断面三角形状を示している。

この背面文様上には、鉢をはさんで2箇所に型キズと思われるものが認められる。その一つは、一見頭部と身部からなる獸形のものであり、凸帯と鋸歯文帯の間にあり、他は長方形状のもので、鋸歯文帯に及んでいる。

e 鉄製品

1) 鉄刀子（図版10A-3; 23-2）

鉄刀子は、現存長12.5cmをはかる。把は茎を残すのみであり、刃部もまた鉄錆におおわれている。茎の長さ3.8cm、刃部長8.7cm、刃部幅1.8cm、背幅2.7mmであった。茎と刃部が明確に分れ、肉を形成している。この肉の部分で、土圧のため片面に屈折している。刃部の幅は比較的広い刀子である。茎には、把の遺残と見られる黒色を帯びた多孔質物質が附着している。これはおそらく有機質系の把材の痕跡を示すものであり、鹿角などが用いられていたのではないか

と推測される。この茎では鉄綱がそれほど著しくないが、刃部では綱が著しく、鞘木が綱着しているものと観察される。

この刀子で注目されたことは、刃部中央部に「櫛」の銹化痕が認められたことである。この銹化痕の認められた側は、出土時には下面となっていた。この櫛の銹化痕は、半円形状の柄部の圧痕の一部であり、高さ1.5cm、下端幅2cmと推定される。柄部中央には縦に結縛の痕跡があり、細い竹繩を縛っていたことが匂われる。櫛としては、小形の堅櫛である。

2) 鉄鎌 (図版10A-2; 23-3)

鉄鎌は、現存長10.6cmであり、細根式刀子形の鉄鎌である。刃部は長さ2.8cm 幅0.7cm、背幅2.5mmである。鎌被部分の先端は折損している。この鉄鎌では、現存部の鎌被部分にわずかに鎌の遺残が認められ、さらにその外側を幅3mmの鉄製環がめぐっている。おそらく鎌の口をおさえるための金具であろうと思われる。

f その他の遺物

その他の遺物としては、中世陶器、縄文土器などがあげられる。

① 中世陶器

(イ) 片口土器 (図版10B-4; 23-4)

古墳東南部の墳丘斜面の表上下で出土した。墳丘に浅い凹みがあり、そこにいく分埋れるようにして、底部を上、口縁部を下に向けて、つまり、完全に反対になって検出された。いわゆる摺鉢形の陶器で、口縁の一側に小さい片口がつけられている。色調は橙褐色で焼成は良好である。成形は巻上げによる。外向の調整は横ナデで、内面は、上半が横ナデ、下半がタテのヘラケヅリによっている。底部には、焼成後あけられた径3cmほどの不規則な円孔が穿たれているが、人為的なものか自然破損したものは不明である。検出時、土器の下からは何も発見されなかった。鎌倉時代頃のものと見られている。(宮城県教育庁文化財保護課技師藤沼邦彦氏の御教示に基づく。)

(ロ) 梶形土器 (図版9-12)

前方部から出土した。底部が欠失していて全形の復原は不可能だが、底部から斜め上方に、ほとんど直線的に立ちあがって口縁部に達する器形である。器高は、体部下半が4mm、口縁部が9mmで、下から上にいくにつれ、次第に肥厚する。成形および調整はロクロ水挽きによる。色調は淡黄褐色で焼成よく、いわゆる須恵系土器と呼ばれるものに類似する。片口土器同様、鎌倉時代頃のものと考えられる。

② 縄文土器：細片が数点出土したのみである。出土部位は、墳丘下の旧表土層と見られる黑色土中および墳丘封土からも若干出土した。縄文のみの破片と沈線のはいった破片とあり、い

ずれも縄文晩期頃のものと見られる。

VI 考 察

(1) 古墳の築造年代について

裏町古墳は、今回の第2次調査によってほぼその全容を明らかにしたといえる。すなわち、墳形からみると前方部がやや低平な前方後円墳であると見ることができる。ただ、十分な調査はできなかったけれども、前方部の形態はやや先端で広がりを示すものがありそうである。また、前方部の置かれた位置が台地の高まりとなっているために、後円部との比高差は約3mに過ぎないが、そのような地形的制約を除いて考えても前方部がやや高まりを示す傾向を示していることはうなづけうる。

この古墳の内部主体は、河原石積の竪穴式石室であった。この石室の築造過程においては、墳丘盛土を切り下げて墓底を掘り込み、その墓底内に3.6×0.8mの石室を作り、墓底壁との間は河原石を充填したものであった。この種の河原石積石室は、近傍では市内長町鹿野前一塚古墳でも知られており、この例では家形石棺がおさめられていた。もちろん、この一塚古墳とは家形石棺を伴なう点で年代的な隔たりを示すが、河原石を用いて石室を構築する方法が、既に裏町古墳の段階で行なわれていたことは明らかとなったといえる。このような竪穴式石室の採用は、この裏町古墳の相対年代が横穴式石室などの採用以前に位置づけられるものであることを示しており、年代考定上で一つの限界を与えている。

この古墳の石室内からは、珠文鏡・鉄刀子・鉄鎌の3点の遺物しか発見されなかった。しかし、この石室の西南部から中央にかけては大きく盗掘されて破壊されているので、元来は刀剣や玉類も副葬されていたものが失なわれてしまっている可能性がある。ともあれ、見出された遺物をみると、小形珠文鏡などがあり、年代を考える手掛かりは認められる。この種の珠文鏡は、多く小形の珠文を配するものが多いが、裏町古墳の例ではやや大き目の珠文を内区に配し、またその外周に太い凸帯をめぐらすという点で特徴的な文様をあらわしている。このような小形鏡の多く用いられた年代は、5世紀頃を中心とする頃とみられる点で、この珠文鏡もまたその範囲の中で考えられるものがあろう。それと共に、石室内からは刀子形を示す細根の鉄鎌が1点発見されている。その鉄鎌の形からすれば、年代は5世紀の後半よりさかのぼることはないと想われる。また、刀子の一側面には櫛の鋸化痕が見られ、小形の竪槽も副葬されていたことが推定された。これらの櫛の副葬されているものは、比較的古い段階の古墳に見られるものである。

これら石室内出土遺物以外に、この古墳では墓底周縁から土師器・須恵器が発見されている。特に、墓底内の擾乱土中から見出され、年代も遅れる糸切底土師杯などを除いて考えれば、墓

埴南縁に置かれた土師器壺はこの古墳の送葬儀礼と関連することは容易に推測される。しかし、この壺は発見時に既に大きく破損されていた為、その全体の特徴を知ることができない。ただ、胴部のカーブよりみてやや下ぶくれ気味の球形壺であったろうとみられる。また、墓埴西縁附近を中心として出土している須恵器破片を復原して考えれば、器台・台付壺・横瓶などがあり、この地域では余り知られていなかった須恵器が知られた。これらの器形の特徴をみると、脚部の形状・方形透しなどよりみてさしてくる須恵器とは見られず、この地域発見のものとしては古い須恵器である。おそらく5世紀後半から6世紀頃のものと思われる。

これらの出土遺物以外に、この古墳では埴輪が認められたり、埴丘裾部には葺石列がめぐっていた。埴輪には円筒と朝顔形の2種がある。それらの配列は十分に把えることができなかつたが、出土位置の知られるものや原位置の推測されるものから考えて、ある間隔をもって埴丘頂部から裾まで数列にわたって立てられていたものと思われる。この埴輪の使用は、この地域の古墳としては古い様相を示すと思われるが、組み合せも円筒と朝顔形のみであるので十分に年代を想定するにはいたらない。ただ、人物などの新しい年代に属する埴輪を含んでいないし、葺石などをめぐらしている点で相対的には年代を下らせるることはできないであろう。

以上に述べた古墳及びその出土遺物の特徴から考えて、裏町古墳の築造年代はかなり限定して見てゆくことができそうである。すなわち、埴形からみると前方部の広がり、高まりの傾向を示し、埴輪・葺石を有している点で比較的古い古墳であろうとみることができる。しかも、内部主体として河原石積竪穴式石室を有することは、横穴式石室採用以前の年代を示すものといえる。出土遺物をみると、5世紀代を中心とするとみられる珠文鏡が見られるが、鐵鍌の形態は細根刀子形を示しているので5世紀でも新しい時点以降となる。それはさらに須恵器の特徴からも考えられ、古く考へても5世紀後半以降のものであろう。この古墳の下限をどこまでとするかは問題であるが、この地域で現在までに知られている古墳の様相から考えて、6世紀に下るとしても大きく下るものではないと思われる。これらを考慮して考定すれば、裏町古墳の年代は500年前後の墳と考えるのが最も妥当であろうと考われる。

(2) 古墳の被葬者について

裏町古墳の内部主体は後円部中央に築かれていた河原石積竪穴式石室であった。この石室に葬られた被葬者は、出土遺物から考へても一人である。

この被葬者は、前方部を西とした前方後円墳に頭位を東として葬られていた。このような方位のとり方は、古墳の位置する個所より西方の斜面及び南方の低地にかけての部分に古墳营造者の集団が住んでいたことを示していよう。特に、この古墳が前方後円墳であることを形の上で最も効果的に見ることができるのは南側の斜面から低地にかけての地帶であると観察される

から、その附近に被葬者を含む人々の集落が存在したであろう。

この古墳の被葬者は、この仙台市周辺では数少ない前方後円墳に葬られていた。しかも古墳の規模からみて仙台市内では第3位の古墳である。

遠見塚古墳 主軸110m 前方後円墳

兜塚古墳 直径 50m 円墳

裏町古墳 主軸 40m 前方後円墳

このような古墳に埋葬された被葬者は、この地域でも有力な豪族であったと思われる。特にその点では、東北地方としても現在発見例の少ない鏡を有していたことなどから良く推測できるところである。いまそれらをあげれば、次のようにある。

福島県会津若松市会津大塚山古墳^⑫ 三角縁二神二獸鏡

四獸鏡

捩文鏡

北会津郡北会津村田村山古墳^⑬ 内行花文鏡(2)

安達郡本宮町愛宕山古墳^⑭ 五鈴鏡

伊達郡保原町土橋古墳^⑮ 珠文鏡

相馬市西山表西山横穴^⑯ 珠文鏡

いわき市高阪古墳 2号墳^⑰ 鈴 鏡

伊達郡国見町塚之目古墳^⑱ 素文鏡

宮城県伊具郡丸森町田町古墳^⑲ 六鈴鏡(2)

内行花文鏡

仙台市鹿野一丁目一塚古墳^⑳ 鳥文鏡

仙台市富沢 裏町古墳 珠文鏡

古川市小寺団^㉑ 変形獸文鏡

このような副葬品を有する被葬者であることは、おそらく在地における有力豪族であるだけではなく、中央政権ともかかわりを有した者であったと思われる。鏡のように、東北地方などで鋳造の考えられない遺物を所有していたことは、畿内中央との関連なしには考えられない性格を示している。もちろん、この古墳の位置した富沢周辺も早くから農耕適地として開けたところであり、その生産力を背景として生れてきたものであることはいうをまたない。

この古墳の被葬者は、仙台平野の中でも名取川の北岸地域で代表的な豪族であったと思われる。その活動は、広瀬川の東側の遠見塚古墳や、名取川を挟んで南方の植松丘陵地帯にある雷神山古墳などの古墳に統いて5世紀末葉頃にかけて見られたものと思われる。この頃からこの富沢周辺では古墳营造が進められ、6・7世紀代の古墳が後続点在するようになったものと考えられる。

(3) 出土品について

〈a〉 墓輪

- ① 出土品の8割以上が埴輪であったが、完形品および原位置を保っているものはきわめて少なく、それぞれ数点を数える程度であり、埴輪の配列などを復原することは困難である。
- ② 出土埴輪では、筒形円筒埴輪、朝顔形埴輪などが見られたが、形象埴輪と思われるものは、今回の調査では全く認められなかった。
- ③ 形態的には、埴輪は、大きく上記二種のようになるが、細部の形態で、さらに何種類かに分けることが可能である。すなわち、口縁の形態、大きさ、底部の形態、凸縁の形態、透かしの形態などの面に2・3の変種が認められるようである。また、前方部から出土した方筒形の埴輪は、他にあまり類例を見ないものである。
- ④ 焼成、成形、調整など、埴輪の製作技法の面からもまた、数種類の変種を認めうる。焼成には、陶質の埴輪を含め3種類、調整の面では、刷毛目の種類などに技法的な変種が認めうる。これらは、③における形態上の変種の存在と考え合せ、製作集団の多様性を示すものかもしれない。しかし、今般を通してみると、本古墳出土の埴輪は、非常に企画的であり、入念さがこもっていると見てよく、並んだような形態の埴輪はほとんど見られなかった。
- ⑤ 総体的に構造との関係はつかみにくかったが、その中でも、断片的ながら注目すべき点もいくつか認められる。第一は、後円部墳頂縁辺に埴輪列が想定できること、第二には、前方部と後円部の接点付近、中軸線周辺で、小型埴輪が割り方を伴つていくつか発見されていること、(このことは、後円部と前方部を区画していることを意味するものと思われる。)第三には、前方部縁辺にも、埴輪列とおぼしきものの存在が想定できるが、その中に方筒埴輪など特異な固体が含まれていることなどである。
- ⑥ 本古墳では、相当量の埴輪が出土したわけであるが、これらの埴輪の供給地はどこに求められるのであろうか。今の所、仙台市内のみならず、県内でも埴輪窯跡として確認された窯跡は発見されていない。そこで、周辺の埴輪出土地を求めてみると、
- ⑦ 富沢窯跡：仙台市富沢・裏町古墳から0.5キロ
- ⑧ 須佐家遺跡[◎]：仙台市富沢・裏町古墳から0.5キロ
- ⑨ 宿在家遺跡[◎]：仙台市富沢・裏町古墳から1.4キロ
- ⑩ 皿屋敷遺跡[◎]：仙台市大野田・裏町古墳から1.9キロ
- ⑪ 岩切中校庭遺跡：仙台市岩切・裏町古墳から11.3キロ（伝聞）
- ⑫ 新田遺跡：多賀城市新田・裏町古墳から11.9キロ（伝聞）
- このうち、⑦、⑧、⑨、⑩、⑪はいずれも平地で、これらは、かつて、この近辺に埴輪を有する

古墳があって、それが開墾の為くずされて埴輪だけがちらばっているものかもしれない。④は、裏町古墳と同じく丘陵裾の緩斜面上にあり、また⑧文献の略図中に、位置的に符合する古墳があったことが知られており、やはり古墳跡かと考えられる。⑤は、丘陵南斜面の高所の切通し部分に、数基の窯の断面が露出していて、付近からは瓦や鉄片など種々の遺物が散見できる中に埴輪破片が混じっている。地形的に見ても、距離的にも埴輪窯が埋蔵されている可能性が高い。(第10図)

つまり、裏町古墳をはじめ、西多賀地方の古墳の埴輪は、三神峯丘陵を中心とする丘陵部で製作され、各古墳に供給されたものと考えられる。(付記：昭和49年4月5日、古窯跡研究会(代表渡辺泰伸)により富沢窯跡が調査され、埴輪窯が確認されたと現地で成果発表が行なわれた。)



第10図 富沢窯跡

(b) 須恵器および土師器

- ① 須恵器、土師器は、後円部主体部盗掘坑周辺から集中的に出土した。総量は、平箱3箱分程度である。原位置を保って検出されたものはほとんどない。このため、出土状況を厳密に検討するまでには至らず、古墳築造当初の副葬品と断定するには若干の疑問がないでもない。ただし、土師器の内黒坏は、明らかに平安期のものであって、これは、後世まぎれこんだものか、あるいは、平安期にも信仰の対象として考えられて供献されたものかもしれない。
- ② 出土品の器形を検討してみると、須恵器は、横瓶、台付壺、壺、罐などが目立ち、土師器では、古手のものでは壺、高杯がある、儀器的性格が強いと思われる器形が目立った。杯や壺など日常的用途を主とする器形はほとんど見られなかった。
- ③ 製作技法的な面では、須恵器は、色調、焼成の面で大きく2つに分けることが可能である。一つは、暗灰青色で焼成の良好なもの、もう一つは、灰白色で焼成不良で生焼けのような感じのもので、個体数としては、後者の方が多い。成形はほとんどが巻上げによっているが、小型壺や罐の一部など薄手のものについては不明である。調整は、上記一部のものを除いては、全般的にやや粗雑である。特に、内面の調整は粗で、横瓶などは、指ナデ調整の際の指紋の痕跡が隨所に見られるし、また、ヘラ調整なども雑で器壁の凹凸が目立つ。外面の調整では、とくに後者のものの中で埴輪に施されていると同様の刷毛目が全面に施されていることが目立った。文様としては、櫛目による波形文が施されていたが、これらは、ごく薄い文様であった。

- ④ これらの須恵器が現地で製作されたものかあるいは関東以西からの移入品なのか実態は全く不明であるが、とくに焼成よく、調整も人念なものに関しては移入された可能性も考えられる。

（C）中世陶器

古墳の裾で発見された片口土器は類似するものが仙台市岩切鴻ノ巣遺跡で発見されており、器形、器質から見ると鎌倉時代頃のものと考えられる。しかも、その出土状況などから見ると藏骨器の蓋ではないかと考えられる。（以上、藤沼邦彦氏の御教示にもとづく。）また椀形土器も同時代のものと見てよいだろう。してみると、墳頂部における内黒十鉢器壺の出土と考え合せて、古墳時代以後中世に至るまで、本古墳が周辺地域の信仰の対象と考えられていたことを示すものかもしれない。

VII 仙台市内の古墳中における裏町古墳の位置

以上に見て来たように裏町古墳は、三神峯丘陵の麓の傾向に長さ約40m、後円部径25~26m、前方部14~15m、高さ後円部4.5m、前方部0.8mの西面する前方後円墳であり、墳丘上には、帶状をなして墳丘をめぐる葺石と埴輪円筒列を有する。内部構造としては後円部頂上近くに長さ3.6m、幅0.8mの古墳主軸に平行する河原石積の豈穴石室を有する。石室内には木棺におさめた遺骸が埋葬せられたと推定された。早く盗掘に逢い副葬品はすでに失われていたが珠文鏡、鐵鎌、刀子、櫛などが幸いに残存していた。これらの特徴から、紀元500年前後の造営と判定された。

ところでこのような裏町古墳は、仙台市内の古墳の中でどのような位置を占めるのだろうか、仙台市内には約34ヶ所に古墳とおぼしきものの存在がみとめられる。[◎]

そのうち形も小さく、また埴輪や葺石もなく、内部施設も不明なため古墳であることの確認し難いものや高塚を形成しない横穴を除くといわゆる高冢古墳として確定なものは7基になる。

その中で岩切熊沢にあった棟家古墳[◎]以外は、市の西南部に集中的にあることは注意すべきである。すなわち国の指定史跡である遠見冢古墳を最東端とし、法領塚古墳、兜冢古墳、一塚古墳、二塚古墳、裏町古墳と約5kmの間に6基の古墳が存在するのである。

遠見塚古墳(第11図)遠見塚一丁目にある。仙台平野の真中に南面してつくられた全長110mの前方後円墳で、墳丘は少し崩れているが、もとの幅は後円部62m、前方部38mぐらいと推定される。高さは後円部6.7m、前方部2.5mである。前方部高が後円部にくらべて著しく低く、かつ幅が狭くていわゆる柄鏡式前方後円墳であるのがこの古墳の形態的特徴である。段は二段ある。埴輪、葺石は発見されない。いまは仙台バイパスで前方部の一部を削られているが、宮城県名取市の雷神山古墳、福島県会津坂下町の亀ヶ森古墳につぐ東北で第3位の大古墳で、昭和43年に国の史跡に指定された。昭和22年進駐軍が環状飛行場整備のためこの古墳の後円部を崩して土採りした際、墳丘下2mのところに2.25mの間隔を置いて粘土郷が2本あらわれたが、西郷上から土師器の壺が1個採集されただけで他に遺物はなかった。この土師器は南小泉式の土師器であるところから5世紀前半の造営と判定される。仙台市内で最大、最大の古墳である。[◎]

法領塚古墳(第12図)遠見塚古墳の北西1.1km、一本杉の聖ウスルラ学園の校庭にある。径32m、高さ6mの円墳で、その南方に偏して長さ5.7m、幅1.9mの玄室があり、玄門の前に幅1.24m、長さ



第11図 遠見塚古墳

4mの前庭が続く。市内の古墳で横穴式石室を見ることができるところは、ここだけである。7世紀初頭のものと思われる。[◎]

兜塚古墳(第13図) 桐原町の宮城県立農業高等学校のグランドのわきにある。径50m、高さ5.5m、三段築成で、市内にある円墳としては最大のものである。葺石および埴輪円筒の破片が見られる。まだ発掘されていないので、内部構造は不明であるが、その大きさ、埴輪の存在から見て5世紀後半の造営であろう。[◎]

一塚古墳(第14図) 長町鹿野前31番地、すなわち現在の鹿野一丁目にあった円墳であるが、現在は破壊され、その跡には家が建ってむかしのおもかげをしのぶべくもない。円墳の大きさは径24~35mぐらいのものといわれている。明治39年4月6日、この墳丘の中央部より南東よりの処で板石5枚をもって蓋をした幅約1m、長さ4.2m、高さ約1mの平石積石室が発掘され、その中から家形石棺が発見された。この石棺はいま出土遺物と共に東京国立博物館にあるが、砂岩を削り抜いてつくられたもので、蓋と身とからなり、蓋は蒲鉾形で高さ45cm、長さ238cm、幅85~90cm、両側の斜面に径36cm、円形の縄掛突起が2個ずつ、合計4個ある。内側は深さ23cmの半円形に削られている。身は上縁で測って長さ233cm、幅80~86cm、高さ58cmで、合せ口は印籠造りになっている。身にも縄掛突起が2個ずつ、4個ある。

石棺内からは六乳鳥文鏡一面、硬玉製勾玉2個、碧玉製勾玉3個、ガラス小玉458個、滑石製白玉6個および金環1個が発見された。



第12図 法領塚古墳横穴式石室



第13図 兜塚古墳



第14図 一塚古墳出土家形石棺

鏡は径16.1cmの後漢時代後半のもので、東北出土の中国鏡として唯一のものである。家形石棺は普通横穴式石室より出土し古墳時代後期に盛行したものと言われているが、この石棺は堅穴式石室の中にありしかも横幅がせまく、かつ縄掛突起が丸い点で家形石棺では古い型式と見られ、6世紀初頭の造営と見られる。この古墳には埴輪はなかったようである。[◎]

二塚古墳(第15図)一塚古墳の西500mの長町鹿野前9番地にあった。一塚古墳とは指呼の間であったろう。昭和24年に削平されてしまい、現在ではその跡を探すことさえ困難である。大きさについては諸説あるが、長さ約30m、径前方部、後円部ともに15m、高さ後円部4m、前方部2.5mぐらいのものであったとするのが妥当であろう。西向きの前方後円墳であったことは諸書の記述の一貫するところである。明治38~39年頃発掘され、後円部から凝灰岩の刳抜石棺の身が出土した。長さ約2.6m、幅約1m、高さについては記したものがないが、写真で見るに70cmぐらいのものであろう。穴の深さは30cmぐらいと伝えられている。上縁が印籠造りににくらされているから元来は蓋があったと思われるが、合蓋は発見されず、板石が出たというが、その板石も発掘者の言によれば石棺の上から出たものではなく、別の場所から出た由である。『仙台市史』では底が丸味をもっているので舟形石棺としたが、高さから見ると家形石棺とするのが適当であろう。

填丘上には礫石が散在しており、埴輪円筒の破片がひろえた。「石櫛、陪塚、濠、階段を有せず」[◎]との報告があるから散在する礫石は葺石かも知れぬが、葺石にしては浮いているものが多かった。すべて失なわれたいまとなっては、確かめるすべがない。[◎]



このような古墳は古代豪族の墓であり、古代にこの地方を支配していた首長の墓であることはいうまでもない。そして古墳は大和地方で発達したものと見られるから、その仙台地方における存在は、大和文化の仙台平野への伝播を物語ると共に、当時の仙台地方が古墳によってその権力を表示し得るほどの権力者を必要とする社会になっていたことを示すものである。

仙台附近で古い古墳の多いのは名取市であって、ここは東北第一の古墳地帯である。東北最大の古墳である雷神山古墳、4世紀後半まで測ると思われる宇ヶ崎一号墳[◎]、埴輪家や埴輪甲を出し、かつ直弧文ある鹿角刀装具を副葬した長持形湯桶石棺を出した経塚古墳[◎]、前方後方墳である薬師堂古墳、靈音堂古墳[◎]など東北でも注目すべき古墳がこの地に密集している。仙台市の西南部に存在する古墳は名取の古墳と一連のものとして理解すべきであろう。

仙台市内に古墳がつくられたようになったのは遠見塚古墳が示しているように、名取地方よ

第15図 二塚古墳出土刳抜石棺

り若干おくれて5世紀前半と見られるが、遠見塚古墳が東北第3位の大古墳であることは、東北有数の首長が仙台附近に居住していたことを示している。仙台平野は律令政府の東北開拓によって、つまり多賀城設置以後、はじめて拓けたものではなく、それ以前から拓けていたのである。裏町古墳は兜塚古墳、一塚古墳、二塚古墳などとともに、その後も依然として仙台附近が東北の政治、文化の一つの中心をなしていたことを物語るものである。7世紀になると古墳が少なくなるのは、この墳から横穴が流行して来たためであって十手内、宗禪寺、向山、燕沢、岩切台、入生沢など市内各地に多くのこっている横穴群^①がこれを証している。

裏町古墳はこの中にあって兜塚古墳とほぼ同じか、あるいはこれに次ぎ、二塚古墳に先行するものと思われる。

（註）

- ① 伊東信雄「仙台市内の古代遺跡」（『仙台市史』第3巻、昭25）P69
- ② 宮城教育大学考古学研究会『古教考古』第5号（昭48）P3～22
- ③ 宮城教育大学日本史研究会『歴友』第3号（昭43）
- ④ 仙台市教育委員会「三神峯遺跡北東部調査概報」（昭48）
- ⑤ 昭和48年1月、採集者仙台市南沢字金山13、今野由太郎氏より、仙台市教育委員会に寄贈
- ⑥ 註②文献P14、15
- ⑦ 宮城県教育委員会「安久東遺跡発掘調査現地説明会資料」（昭47）
- ⑧ 浜田廉「名取鎮所址」（『宮城県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第5編、昭4）
- ⑨ 仙台市教育委員会「仙台市富沢裏町古墳試掘調査概報」（昭48）
- ⑩ 宮城県教育委員会「八谷館跡」現地説明会資料（昭48）
- ⑪ 仙台市茂ヶ崎の大年寺山一帯に、14世紀中頃から、1世紀以上にわたり当時、名取地方の領主であった栗野氏が居城していた。空濠、土壁の一部が今なお現存する典型的な中世の山城である。
「仙台領古城書上」参照
- ⑫ 伊東信雄、伊藤玄三「会津大塚山古墳」（『会津若松市史』別巻1、昭39）
- ⑬ 穴沢和光「内行花文鏡を出土した会津の一古墳」（『古代学研究』25、昭35）
- ⑭ 福島県史 6
- ⑮ 福島県史 1 P183
- ⑯ 志賀泰治「宮城県伊具郡金山台町古墳群調査概報」（『歴史』7、昭29）
- ⑰ 註①文献P61～66
- ⑱ 「日光山古墳群」（『古川市文化財調査報告』第2集、昭48）
- ⑲ 註②文献P10
- ⑳ 註②文献P14

- ② 註②文献P15
- ③ P 40表1参照
- ④ 伊東信雄、伊藤玄二「鰐塚古墳調査概報」(『宮城県文化財調査報告書』第8集)
- ⑤ 伊東信雄「遠見塚古墳」(『宮城県文化財調査報告書』第1集, 昭29)
- ⑥ 氏家和典「仙台市南小泉法領冢古墳調査報告書」(仙台市教育委員会, 昭47)
- ⑦ 註①文献P59~61
- ⑧ 註①文献P61~66
- ⑨ 高野松次郎「仙台市茂ヶ崎付近にて発見せる古墳」(『考古界』6-2)
- ⑩ 註①文献P55~59
- ⑪ 宮城県教育委員会「名取市宇ヶ崎遺跡」現地説明会資料,(昭47)
- ⑫ 伊藤玄三「古墳文化各説—東北—」(『新版考古学講座』5, 昭45) P168
- ⑬ 氏家和典、加藤孝「古墳文化の地域的特色—東北—」(『日本の考古学』IV, 昭41) P500
- ⑭ 註①文献P71~74

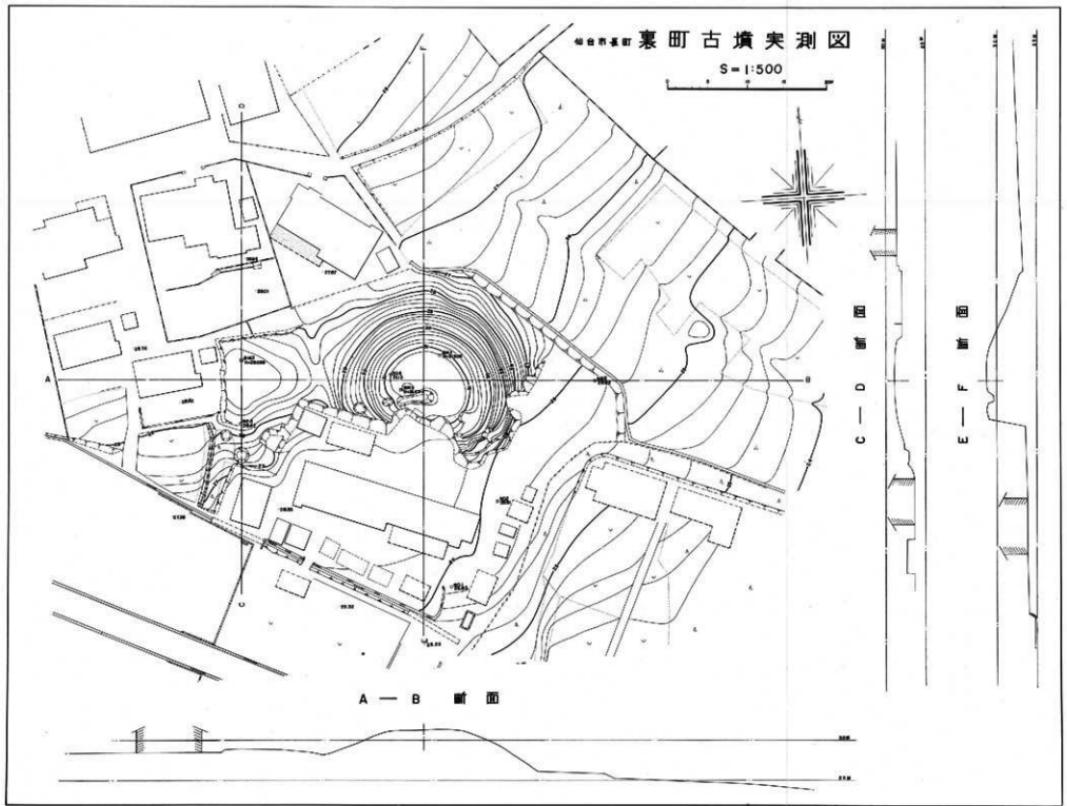
表1 仙台市内の古墳・横穴一覧

昭和49年2月、現在

No.	名 称	埋 制	古 墳 の 様 型	山 土 品	地圖調査の有無	保 存 状 況	備 考
1	通見塚古墳	前方後 円墳	主軸110m、高さ7m N.1度2'	土師器類	昭和22年の東・北調査 （現存せず）	後円部の一部。前方 部は既定。	昭和43年既定
2	法輪寺古墳 円墳		65.2m、高6m 横穴式石室	銅鏡馬具	昭和47、仙台市教育委 員会（担当氏家一 報あり）	後丘はほぼ完存。	
3	犯塚古墳	円墳(?)	55.0m、高6m 横穴、石室を有す		無	東側斜面、道路で 切断	
4	一塚古墳	円墳	横軸34-35m、高3-4m 平頂石室、家形石棺	鳥文鏡、勾玉、ガラ ス、小刀、口玉、金 環	昭和、光鏡（被覆有 なし）	表城（宅地）	山上品、東西西 立向物数點
5	二塚古墳	前方後 円墳	主軸30m、高4m 家形石棺、蓋板		無	表城（昭24、宅地）	
6	美坂古墳	前方後 円墳	小46.0m余、高4.5m 横穴式石室、上身鏡、片 葉石、感石	珠文鏡、刀、鐵鏹 銅鏡、上身鏡、片 葉石、感石	昭和45、仙台市教育委 員会（担当氏家一 報あり）	表城（昭48、宅地）	
7	新塚古墳	円墳	55.0m、高5m 長方形縫合こみみ		昭和37、宮城県教育委 員会（担当氏家一 報あり）	表城（昭37、宅地）	
8	安久東古墳	不明	横軸46.0m、高4.5m 横穴式石室、横穴式石室	武刀、瓦片、鉄鏹、 鉄片、鏡片	昭和47、宮城県教育委 員会（担当氏家一 報あり）	表城（東北新幹線 予定地）	説明会資料
9	千人塚古墳	円墳	直径15m、高1.5m		無	一部崩壊	
10	孝慈寺古墳	円墳	直径15m、高3m		無	神社の鳥、変形	
11	二木塚古墳	前方後 円墳?	主軸15m、高1.5m		無	開拓（操作）	
12	下野田 御陵堂古墳	円墳	直径10m前後、高2m		無	現存	
13	藤原古墳	円墳	直径10m前後、高1-2m		無	操作するも、相当に 崩壊	
14	愛宕下古墳	円墳	直径10m、高2m	鷺文上鏡、石器	無	表城（宅地）	
15	人面谷地古墳	円墳	直径15m、高3m		無	表城（宅地）	
16	金剛山古墳	円墳	直径15m、高3m 何?		無	神社の鳥、変形	
17	砂押古墳	円墳	直径10m、高2m		無	半壊	
18	三神事古墳	円墳 2基	直径15m、高2m、徑13m 高2m		無	跡空洞、各所のなど て、相当崩壊	
19	金沢沢古墳	円墳	直径15m、高3m		無	半壊	
20	教東古墳	円墳?	直径15m、高3.5m		無	現存は削平 跡地保存	
21	上野原古墳	円墳?	直径10m前後、高2m		無	表城（昭47、宅地）	長闊
22	エビラ原古墳	円墳	直径10m、高3.5m		無	開拓（操作）	
23	人冢山古墳	円墳	直径8m、高3m		無	操作の鳥、相当に 崩壊	
24	鏡丸古墳	円墳	直径8m、高2m 何?		無	東側および南側、削 除	
25	丸天西古墳	円墳	直径7m、高3.8m		無	現存	
26	夷山塚古墳	円墳?	直径8m余り2.2m		無	表城（開山）	
27	人生逆城穴 焼火古墳		数ヶ所? 断面圓錐形の 土の上。冰室、アーチ型合 わ	美器類（沿歴面）	無	一部崩壊	
28	白崎豪情穴群	横穴式石室	20基以上、断面圓錐形6 基、横合を有するもの （くろねき横合）を有する4 基のむ		無	保存良好	
29	東光寺横穴群	横穴式石室	10基以上。新山圓錐形6 基		無	開拓などによる變 化が多い	
30	吉の寺横穴群	横穴式石室	100基前後? 新山圓錐形6 基、アーチ型、家形など	土器類（火、糞、 骨頭、生糞、鐵鏹、鏡、等 ）、刀子、玉など	昭和23、伊豆支那和志 村（現・伊豆市）調査 報告、昭和42、伊豆氏家 （現・伊豆市）調査報告	一部破壊、保存良	昭和43年仙台市 既定
31	愛宕山横穴群	横穴式石室	100基以上? 新山圓錐形6 基	武刀、復刃劍（長 刀）、人骨	昭和44、市教委調査 （報告あり）	破壊、変造著しい	
32	大原今山横 穴群	横穴式石室	数十基		無	破壊、変造著しい	
33	宮原下横 穴群	横穴式石室	數基以上		無	破壊、変造著しい	
34	上手的横穴群	横穴式石室	数十基。新山圓錐形	人骨4体、刀、 鐵鏹（複合、並）	無	昭和44、里防工事申込 用紙、既成窓。現存	

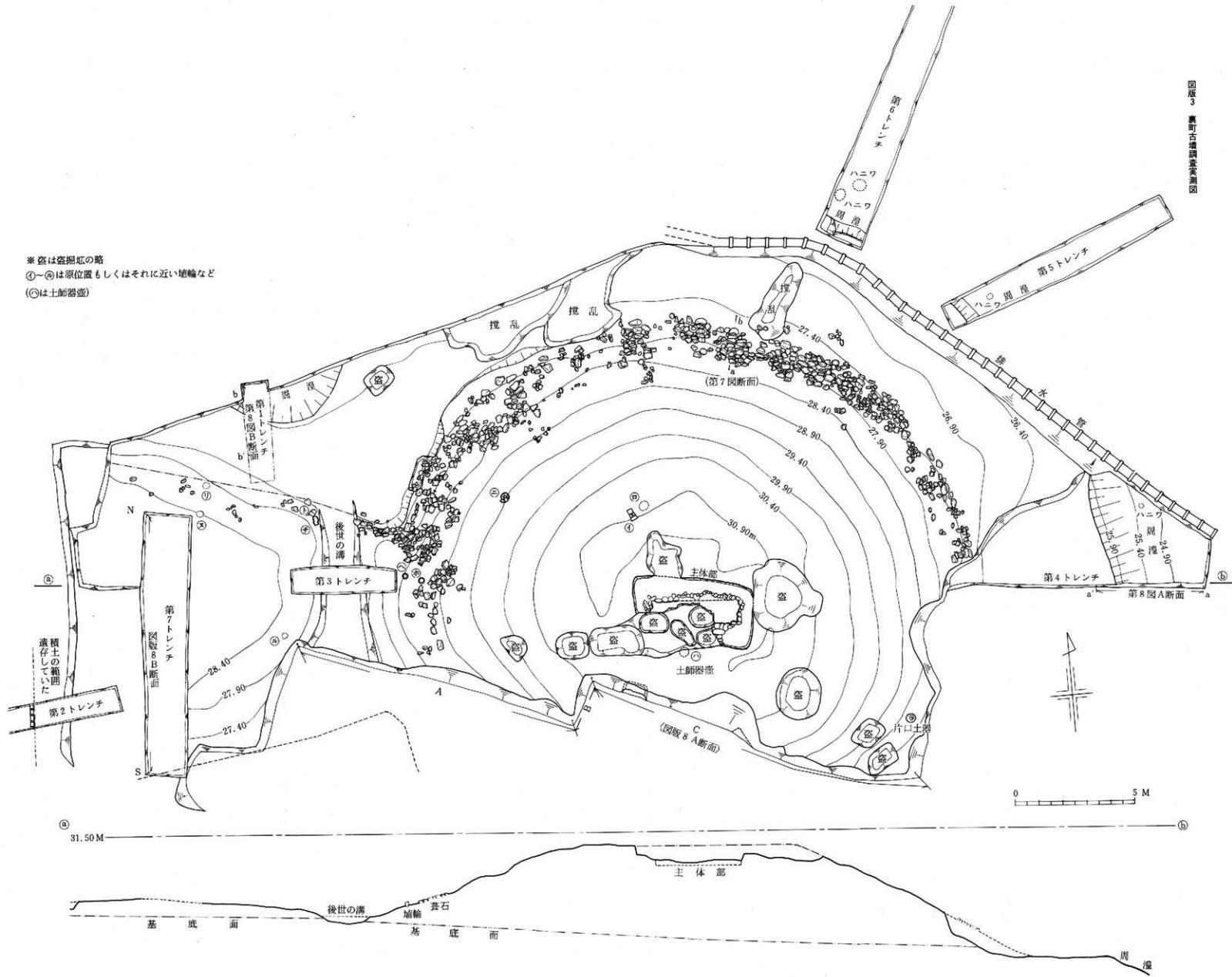


図版一 仙台市内河川・排水分布図 (○ 河川・排水渠 × 河川・排水渠 △ 溪谷)

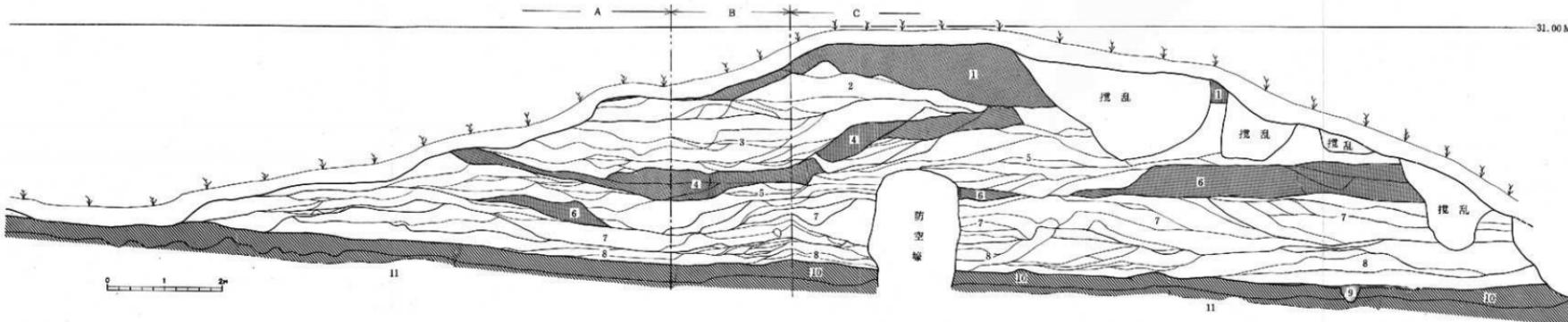


(財)田代人 宮城県文化財保護協会提供

図版2 古墳調査実測図

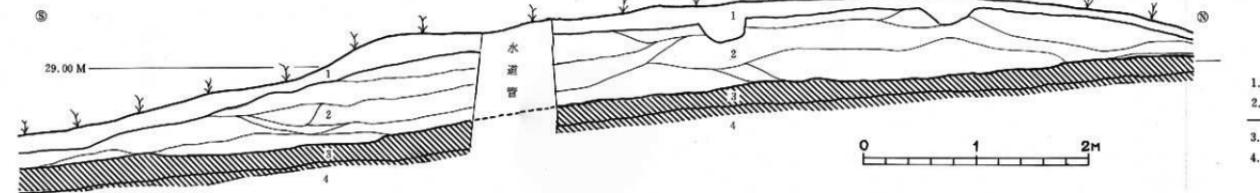


A 後円部土層断面図



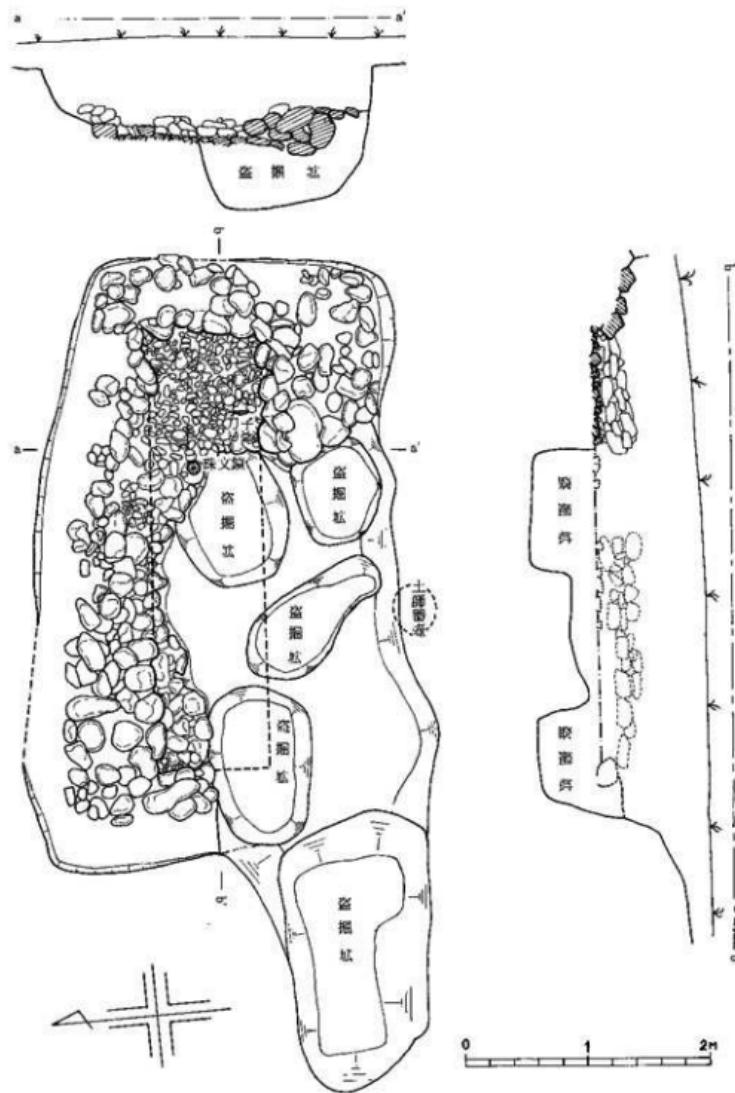
1. 砂礫層（径7～8 cmの円礫を含む）
 2. 互層（黄色粘土と黒色土）
 3. 砂をよく含む互層（黄色粘土と黒色土）
 4. 砂礫層（礫徑5 cm以下）
 5. 互層（黄色土と黒色土、礫は全般に少ない）
 6. 砂礫層（礫徑2～3 cm）
 7. 互層（黄色土と黒色土、礫は少ない）
 8. 互層（黄色土と黒色土、礫は少ない。互層の単位が細かく、かなり固くしまっている）
 9. 黒色土（炭、燒土粒を含む）
 10. 黑褐色土（固くしまっている。鐵文土器を若干含む）→旧土表（基底層）
 11. 黄褐色ローム（粘性強く、小礫を含む）

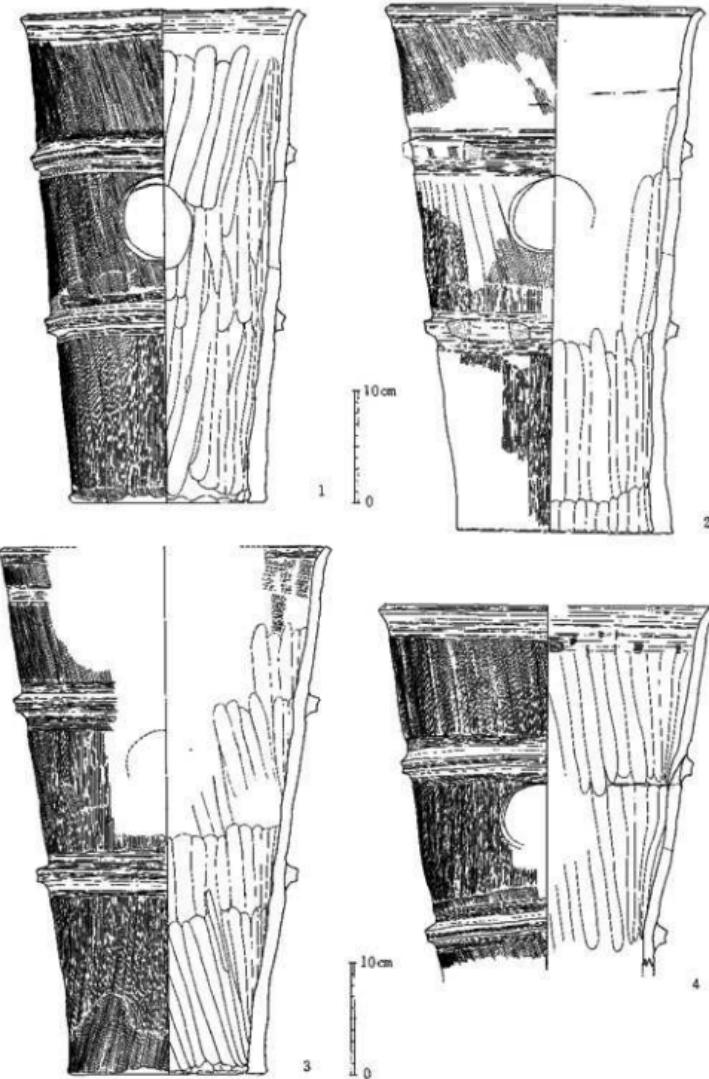
B 前方部上層断面图



1. 表土
 2. 互層（黒色土と黃色土。蹠の混入は稀少）
 3. 黒色土層（固くしまっている）=基底表土
 4. 黄褐色ローム層（櫻を含む）

圖版 5 內部主體測量圖



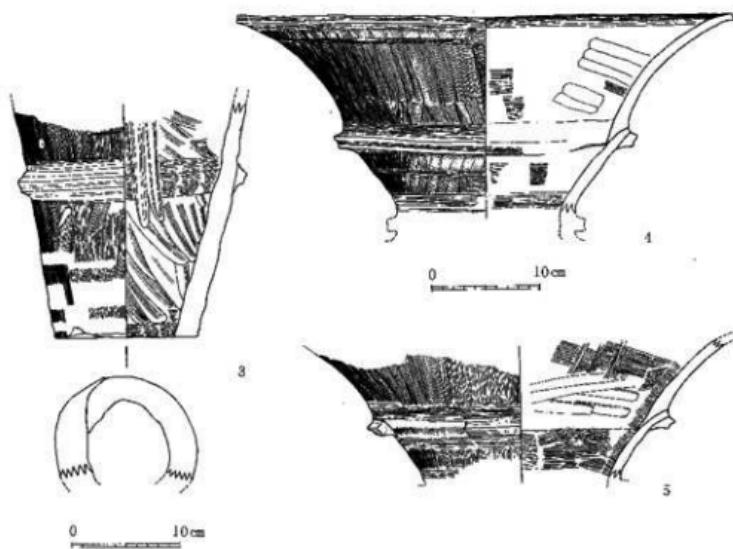
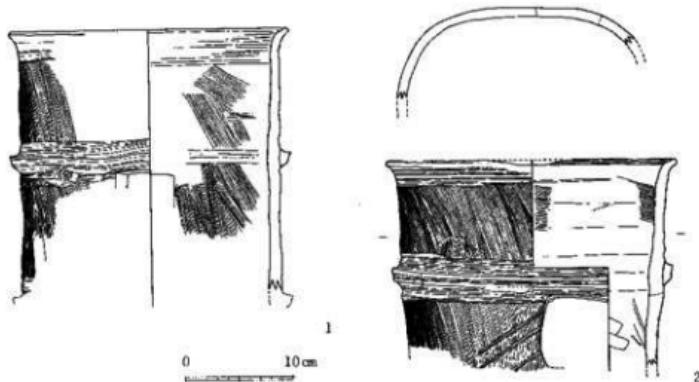


1. 後内部墳頂北西縁辺出土(ハニワ②)

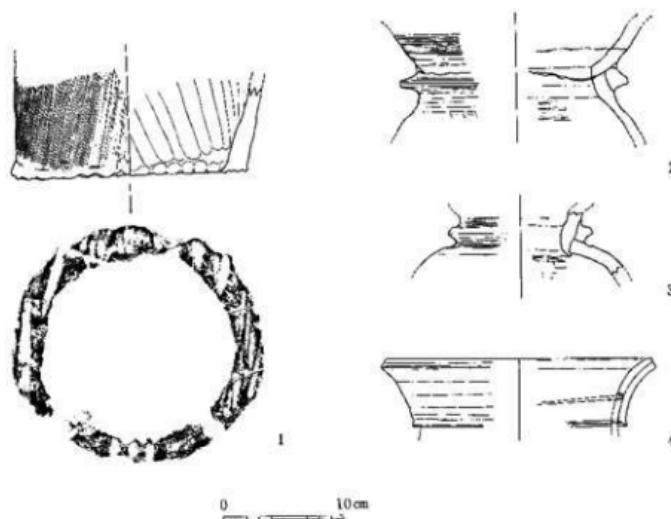
3. 後内部内北斜面出土

2. 第1トレ周溝底出土(摩滅激しい)

4. 後内部東北斜面出土

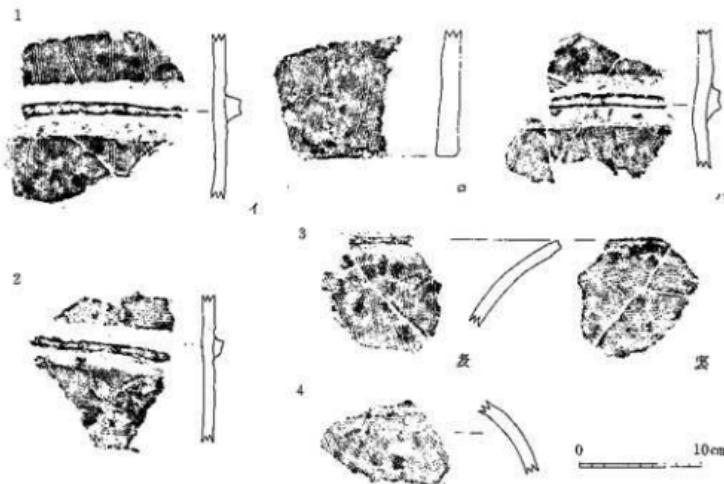


1. 簡形円筒埴輪：前方部北東縁辺出土(ハニワ④)
2. 方筒埴輪：前方部北東縁辺出土(ハニワ③)
3. 小型埴輪：後内部西側縁部出土(ハニワ⑨)
4. 草彌形埴輪：後内部西側縁辺出土(ハニワ⑦)
5. 朝顔形埴輪：後内部東側縁辺出土(ハニワ⑧)



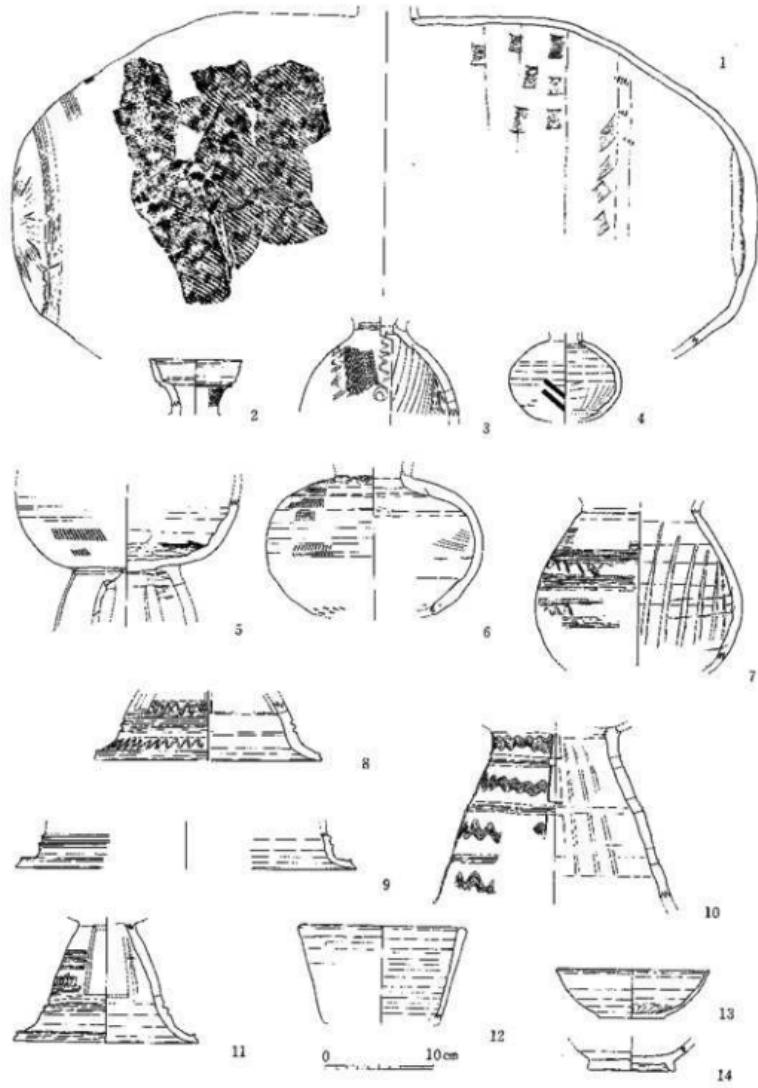
A 各部実測図

1. 内周筋輪底窓（底面にタケ様圧痕あり。後内部傾東北西縁辺川土。ハニワ②）
2. 横面形埴輪くびれ部（後内部北西斜面出土上）
3. 横面形埴輪（後内部北西脇窓川土）
4. 土師器蓋口縁部（後内部頂窓底窓底中）



B 刷毛目拓影

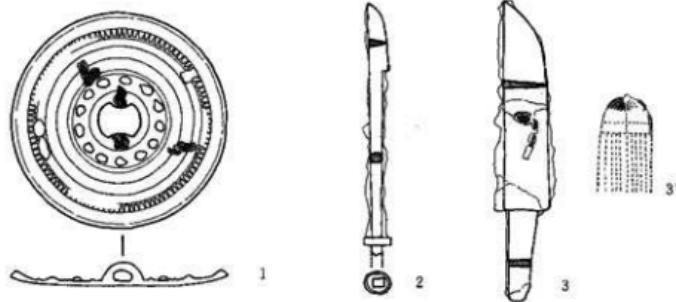
1. 縦刷毛目（イ、5~6/cm間、ロ、7~8/cm間、ハ、10~12/cm間）
2. 横刷毛目
3. 横面形埴輪口縁部刷毛目（左側）
4. 横面形埴輪肩部刷毛目



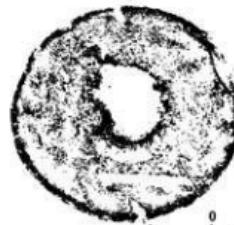
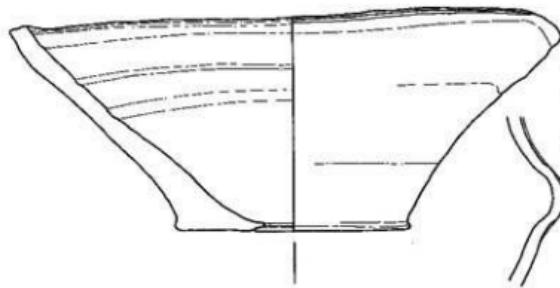
1~11. 須恵器 (1. 横面; 2.3. 腹; 4.6.7. 盆; 5. 台付或
; 8~11. 脚)

12. 中世陶器 (小焼き)

13.14. 土師器 (内墨、系切底)



0 10cm



4

1. 珠文鏡
2. 鋤頭
3. 刀子
(3', 楊說元圖)
4. 片口上器

0 10cm



図版II 西多賀地方航空写真(縮尺1:12,500) ○印が塚町古墳 (昭和46年)

図版12 古墳遠景(三浦峯より、矢印が裏町古墳)



図版13 古墳現状写真(東北より撮影、右手前方が前方部)

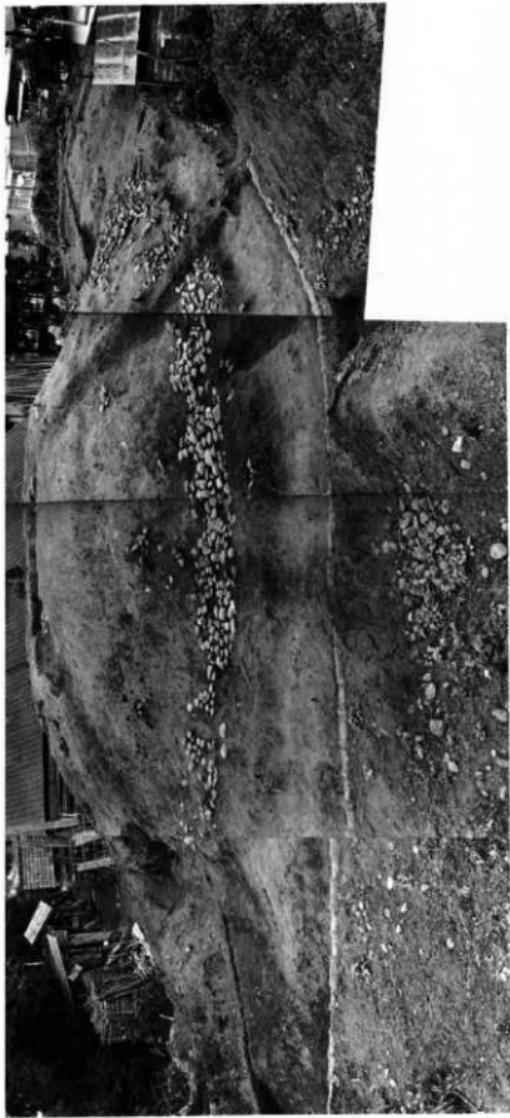




図版14 表土排除の状況



図版15 古墳断面



圖版16
A. 壓石牆出狀況全貌
B. 前方落石、碎石散佈出狀況



b 前方部腰辺縫跡出土状況 (左・ハニワ⑥、右・ハニワ⑦)



d 墓頂主体部分土師器壺出土状況 (⑩)



a 後円部東側頭梁跡出土状況 (ハニワ①)



c 後円部西側頭梁跡出土状況 (上・ハニワ⑤、下・ハニワ⑥)

a 内部主生部出芽部(水田は既又茎)



b 前方窓から見た内部主体 [西方より]



図版19

周邊



図版20

調査元了航空写真(東北電力会社提供、矢印が古瀬)





1.2. 円筒埴輪
3. 小型円筒埴輪
4. 方筒埴輪
5. 扇形埴輪





6

1. 古付蓋
2. 3. 須(1. 口縁部, 2. 体部, 3. 口縁部)
4~6. 須



1



2



3



4

1. 珠文鏡(現寸)
2. 刀子(唐殘片つき)
3. 鉄 錐
4. 片口土器

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然紀念物蠶巖下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年4月）
- 第2集 仙台城（昭和42年3月）
- 第3集 仙台市燕沢善光寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）
- 第4集 史跡除奥園分山寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
- 第5集 仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
- 第6集 仙台市荒巻五本松窓跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
- 第7集 仙台市富沢坂町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
- 第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年4月刊行予定）

仙台市文化財調査報告書第7集

裏町古墳発掘調査報告書

昭和49年3月発行

発行 仙台市教育委員会

仙台市国分町3-7-1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL(25)6466(代)



支社新設シンビルマーク